八	五一、〇〇〇	五一、〇〇〇	
九	五七、一二〇	五七、一二〇	
一〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	
一一	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	
一二	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	
一三	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	
一四			
大正一五 昭和元			
合計			

第三章　海軍煉炭事業

第一節　海軍煉炭製造所創設及其初期事業

海軍煉炭製造所設立ヲ議ス（明治三十六年）

我海軍ノ燃料ハ結局我國土ニ産出スル石炭ヲ以テ製造セル煉炭ニ依ルノ外ナシトノ結論ニ達シ既ニ明治二十九年一旦海軍煉炭製造所設立ノ内議ヲ定メラレシガ其後間モナク天草炭業會社起リ軍用煉炭製造ノ見込ヲ得ルニ至リシカバ海軍ハ差當リ先ヅ此民間事業ヲ指導シ其發達ヲ計ルコトヽセリ其結果ハ既ニ述ブルガ如ク所謂天草煉炭トシテ軍用炭ヲ供給シ得ルニ至リシガ其ノ後ノ經過ハ原料炭等ノ關係上到底同社ノ力ノミヲ以テシテハ供給ノ安定ヲ期シ難シト認メラルヽノミナラズ此間別ニ記スルガ如ク長門無煙炭礦會社ノ長門炭ヲ原料トスル煉炭企業ノ如キモ海軍ノ督勵ニ不拘實現困難ノ狀況ニ在リタリ

海軍當局ハ之等ノ狀勢ヲ考ヘ夙ニ海軍煉炭事業ノ官營ニ關シ調査案劃シツヽアリシガ明治三十六年十月時局漸ク急ナルニ及ビ坂本艦政本部第二部長ハ之ニ關シ所見ヲ具申セリ

本具申ハ當時ノ事情ヲ知ルニ便ナルヲ以テ之ヲ左ニ錄ス

明治三十六年十月

海軍艦政本部第二部長　坂本一具申

官業トシテ軍用煉炭ヲ製造スル儀ニ付意見

戰時我艦船艇ニ於テ使用スベキ無煙燃料供給ノ途ヲ確定スルノ儀ハ極メテ重要ノ問題ナルヲ以テ當局者ニ在テモ豫テ最注意スル所ナルモ今以テ安心ノ域ニ達スル能ハズ戰時需用ノ大部分ハ之ガ供給ヲ英國**カーヂフ**炭ニ仰ギ平素ヨリ巨額ノ數量ヲ貯藏スル必要アルコト敢テ二十七八年役以前ト異ル所ナシ而シテ斯ノ如キ方法タルヤ其ノ購買價格ノ上ニ於テ啻ニ非常ナル不經濟アルノミナラズ元來石炭ハ年月ノ久シキト共ニ其ノ質ヲ損スルコト尠ナカラザルヲ以テ決シテ萬全ノ策ニアラズ一朝事アルニ當テハ百方運策價ノ高下ヲ論ゼズ**カーヂフ**炭ヲ購買シ數量ヲ補充スルコトハ實際止ムヲ得ザル所ナリ

然ルニ東洋ニ事アル日ニ際シ巨數ノ**カーヂフ**炭ヲ購入スルコトハ甚ダ容易ナラザルコトニシテ現ニ刻下ノ時局ニ際シ窃ニ警戒ヲ加ヘ東洋諸港ニ於ケル**カーヂフ**炭ノ貯藏高ヲ調査シ之ガ買收ノ方法ヲ講ジタルモ貯量僅少ナルガ上ニ競買者少ナカラヌ爲到底之ニ信賴スベカラザル

ヲ發見セリ而シテ供給ヲ遠ク英本國ニ仰グノ策タルヤ事元來止ムヲ得ザルニ出ルト雖モ其ノ迂遠ナル論ヲ俟タズ且ツ迅速ニ多量ヲ獲ルガ如キハ期シテ望ムベカラザルコトタルヤ明カナリ

如上ノ危險ニ鑑ミ邦内ニ於テ軍用燃料ノ供給ヲ豐裕ニ且ツ安全ナラシムルノ途一ツニ只基礎確實ナル煉炭製造所ヲ起スノ外他ニ策アルヲ見ズ而シテ今日ニ在テハ幸ニシテ我海軍ニ於ケル此事業ニ關スル實驗調査等ハ頗ル進行シ殆ンド缺クル所ナキヲ以テ相當ノ資本ヲ投ジ官有煉炭製造所ヲ設立セバ其軍事的事業トシテ充分ノ成功ヲ遂ゲ軍用燃料供給問題ヲ解決スルニ至ルベキ疑ヲ容レザル處ニシテ之ヲ確言スルヲ憚ラザルナリ

煉炭製造業者民間ニ存セザルニアラズ而モ軍用燃料供給所トシテ充分信賴スルニ足ルモノアルヲ見ズ夫ノ日本煉炭株式會社ノ如キ海軍省ガ今日ニ至ルマデ補導ヲ與ヘタルコト決シテ僅少ニアラザルモ如何セン種々ノ困難ニ遭遇シ近キ將來ニ於テ現今ノ程度以上ニ發達ノ望アルコトナシ長門無煙炭鑛株式會社ハ廣大ナル無煙炭田ヲ有シ炭層壹丈ヲ超ヘ原料ノ豐富ナル採炭事業ノ容易ナル多ク其ノ類ヲ見ザル處ニシテ彼ノ天草炭田ガ區々各地ニ散在シ而モ炭層極メテ薄ク營業ノ甚ダ困難ナルガ如キ同日ノ論ニアラザルナリ其ノ品質ニ於テモ亦海軍石炭調

査委員數次ノ調査ニ依ルニ頗ル見ルベキ所アルモノニシテ軍用無煙燃料トシテ著明ノ長所ヲ特有スルヲ認ム

故ニ當局者ハ該會社ヲシテ煉炭製造所ヲ起サシメ既成ノ日本煉炭株式會社ト相竝テ軍用無煙燃料製造ノ業ヲ營マシメンコトヲ企圖シ之ガ爲種々ノ試驗ヲ擧行シ海軍ガ斯業ニ於テ究メタル事柄ハ漏サズ之ヲ敎示シ輔導至ラザル處ナカリシナリ而シテ調査研究ノ結果明ラカニ長門無煙炭ノ軍用煉炭原料ニ適當ナルコトヲ確認シタルモ運炭用鐵道架設費ノ採炭及煉炭ノ營業資本ニ加ハルガ爲豫想外ノ資金ヲ要シ當局者ノ希望經營遂ニ水泡ニ屬スルニ至レリ民業トシテ既成竝ニ將ニ起ラントスル煉炭會社ニ關スル現時ノ概況以上述ブルガ如ク一ツモ人意ヲ强フスルニ足ルモノナク最早今日ニ於テハ官業トシテ之ヲ創ムルニアラズンバ他ニ安全ニ軍用煉炭ヲ供給スルノ途アルヲ見ザルナリ而シテ煉炭供給ノ方法確定スルニアラズンバ燃料供給ノ獨立ハ遂ニ期スベカラズ此ヲ以テ海軍省ハ宜シク過去五年間ノ實歷ニ鑑ミ軍用煉炭供給ノ責務ハ民間ニ一任シテ到底好績ヲ收メ難キコトヲ識認シ別紙二方案ノ一ツニ據リ自ラ之ヲ營業シ以テ此ノ重要問題ヲ解決センコト小官ガ爲國家切望措ク能ハザル所ナリ玆ニ別紙方案書ヲ提出スルト共ニ軍用燃料供給ノ方法ニ關シ現時ノ狀況ヲ略述シ謹テ卑見ノアル處ヲ具申ス

第一方案

刻下ノ問題ニシテ終ニ平和ノ局ヲ結ブ能ハズ戰時費ヲ臨時議會ニ要求スルコトアラバ無煙炭購買費ノ中ニ長門無煙炭礦買上ゲ及採掘竝ニ煉炭製造所設立ニ要スル費用ヲ加算スルコト

一、長門無煙炭礦買上費　金貳拾五萬圓
一、同　開礦費　金貳拾五萬圓
一、煉炭製造所設立費　金六拾萬圓

第二方案

若シ平和ニ局ヲ結ビ臨時費ヲ請求スルガ如キコトナクンバ第一方案ニ示ス處ノ豫算ハ之ヲ通常ノ手順ヲ以テ議會ニ請求スルノ外ナシ而シテ國庫豐カナラザルノ日經費ノ增加ハ絶對的ニ之ヲ否認セントスルノ今日ナルヲ以テ止ムヲ得ズ左ノ方法ニ據ラントス

一、軍令部ノ計畫ニ據レバ準備炭トシテ平素貯藏スベキ英炭ノ數量ヲ今日ノ海軍ニテ三十萬噸ト規定セリ而シテ現在ノ英炭ノ量ハ約十七萬噸ニシテ註文中ノ分四萬噸合計二十一萬噸外ニ第一種煉炭四萬噸ヲ貯藏シ來年度ニ於テモ亦約三萬噸ノ第一種煉炭ヲ購買スベキヲ以テ準備炭ノ支出ヲ制限セバ明年度ノ終ニ在テハ總額約二十三四萬噸ニ達スベキナリ

故ニ明治三十八年度及三十九年度ノ二ヶ年間英炭ノ購買ヲ止メ之ガ爲ニ生ズル剩餘金五拾五萬圓ヲ炭田購買及製造所設立ノ費用ニ充ツベキコト

右五拾五萬圓ノ外新原採炭所ヲ特別會計法ニ據リ事業廳トナストキハ別表ニ示ス處ノ如ク三十八年度以降三ヶ年間剩餘金八拾萬二千圓ヲ得ルヲ以テ明治四十年四月ヨリ事業ヲ開始シ得ベキナリ

（別表省略）

一、以上二方案何レニ據ルモ山陽鐵道會社ニ對シ左ノ補給ヲ爲スヲ要ス

明治四十年度補給金額　金八一、〇二二圓七〇錢　豫定出炭量二萬噸

同　四十一年度　同　金六五、八三二圓六〇錢　同　四萬噸

同　四十二年度　同　金四六、五一八圓六〇錢　同　七萬噸

同　四十三年度　同　金二四、八九〇圓五〇錢　同　十萬噸

理由

目下貯藏セル準備炭ハ約二十萬噸ニシテ我全艦隊ノ行動ニ對シ僅ニ四ヶ月ヲ支ヘ得ルニ過

ギズ（一ヶ月十五晝夜航走ノ豫定ニシテ速力ハ平常航海速力）故ニ戰端ノ經過ヲ豫想シ尙ホ約三十余萬噸ノ軍用燃料ヲ購入セザルベカラズ然ルニ日本煉炭會社ノ製造力ハ原料缺乏ノタメ一ヶ年五萬噸ニ過ギザルヲ以テ右需用額ノ大部分ハ供給ヲ**カーヂフ**ニ仰ガザルヲ得ザルモ**カーヂフ**炭ノ如キ之ヲ得ルコト決シテ容易ニアラズシテ須要ノ全數量ヲ購買スルコト殆ンド見込ナシト云フベシ故ニ政府ニテ我國無煙炭田中最有望ナル長門無煙炭礦ヲ買上ゲ之ヲ採掘スルト共ニ煉炭ニ製造スルノ裝置ヲ設備シ戰期久シキニ涉ルノ準備ヲ爲シ且ツ將來ノ基礎ヲ確立セントス或ハ急ニ斯ノ如キ事業ヲ起スモ時局ニ對シ何ノ益スル處ナク戰時ノ費用トシテ支出スベキ性質ノモノニアラズトノ議論ナキニアラザルベシト雖モ元來戰役ノ經過ハ千變萬化豫メ測知シ難ク其ノ繼續ノ時期ノ如キモ明言スベカラザルヲ以テ當局者ハ出來得ル限リ萬全ノ慮ヲ以テ萬全ノ策ヲ講ジ蹉跌ナキヲ期セザルベカラズ是レ卽チ此際必要ナル費用ヲ請求スル所以ナリ

一、運炭用鐵道架設ノ爲金百拾壹萬圓ヲ要スル見込ナルモ該鐵道ハ山陽鐵道會社ヲシテ之ヲ布設セシメ政府ヨリ資金ニ對シ年七分ノ利益ヲ保證スルコト而シテ補給金額ハ第二方案ニ揭ゲタルガ如シ

○戰役中生ズル英粉炭處分ノ爲ニモ煉炭製造所ヲ必要トス

一、開坑費及煉炭製造所設立費ハ純然タル概算ニシテ製造所ヲ建設スベキ土地竝ニ地價工費等調査ノ上更メテ豫算ヲ提出スル場合ハ多少減額シ得ル見込ナリ

一方時局ノ切迫ニ鑑ミ曩ニ常備艦隊諸艦ニ對シ準備ノ爲其炭庫ノ一部ニ英炭ヲ搭載セシメラレシガ明治三十六年十二月艦隊司令長官（艦隊機關長機關大監山本安次郎）ノ電申ニ基キ艦政本部長ハ爾後英炭ヲ艦艇ニ供給ノ場合八分目篩ニテ選炭スベキ旨ヲ各工廠ニ通達セリ之ガ爲各地共今後益多量ノ英粉炭蓄積ヲ豫期セラルヽニ至レリ

而シテ英粉炭ヲ煉炭ニ製造スルコトニ關シテハ既ニ述ベタル如ク曩ニ日本煉炭會社ニ於テ實驗濟ナルモ同社ノ煉炭機ヲ以テシテハ今後生ズベキ之等大量ノ粉炭ヲ完全ニ處理スルコト困難ナルガ故ニ此ノ關係ヨリシテモ此際速ニ長門炭礦ヲ買收シテ煉炭製造所ヲ起シ先ヅ之等ノ英粉炭ヲ以テ優良ナル無煙煉炭ヲ製造シテ以テ軍國ノ急ニ應ジ進ンデ長門炭ヲ採掘シテ原料ニ供シ以テ將來軍用燃料供給ノ基礎ヲ確立スルノ緊要ナルヲ認メ詮議ノ結果茲ニ山本海軍大臣ハ左ノ通無煙炭製造ノ件ヲ閣議ニ提出シ明治三十七年四月一日請議ノ通決定ヲ見タリ

○煉炭製造所設置ノ件閣議決定（明治三十七年四月）

明治三十七年四月一日

驅逐艦ノ製造及無煙炭製造ニ關スル件請議ノ通閣議決定

官房機密第五三八號

驅逐艦ノ製造及無煙炭製造ニ關スル件

今回ノ事件ニ關シ驅逐艦ハ……（中略）……又無煙炭ハ現今ノ場合ニ於テ各艦ノ行動上英炭ヲ消費スルモ英炭ハ高價ニシテ長ク各艦ヲシテ之ヲ使用セシムルハ經濟ノ途ニ非ズ苟モ軍費ノ節制ヲ努ムルト共ニ軍事行動上ノ便宜ヲ謀ラントセバ一日モ速ニ內地ニ於テ無煙炭製造ノ途ヲ講ゼザルベカラズ實ニ交戰ノ進行ト共ニ最大急務ナリトス依テ驅逐艦二十五隻ノ製造及煉炭製造所ノ設立ヲ企畫シ別紙計算書ノ通臨時事件費ヲ以テ支辨決行致度茲請閣議

追テ別紙計算書中煉炭製造所設立費百六萬余圓ハ豫而大藏大臣ニ交渉シタル豫定金額中ヨリ節減ヲ圖リ支出スベキ計畫ニ候又本所ノ設立ニ付テハ石炭運搬ノタメ山陽鐵道會社ヲシテ炭山ヨリ厚狹停車場マデ一ケ年六朱ノ補給ヲ以テ鐵道ヲ布設セシムベキ計畫ニ有之此

ノ補給ハ三十七年度ニハ未ダ之ヲ要セズ其後ニ至リ戰時中ハ既定計畫豫算内ニテ臨時事件費ヲ以テ支辨シ平和克復ノ上ハ石炭購買費ヲ減ズルガ爲經常費ヲ以テ支出差支無之儀ニ候

（別紙）

金百六萬九千二百三十七圓三十五錢　　煉炭製造所設立費用

但シ炭山購買費共　　十二月迄ニ完成ノ見込

（以下略ス）

煉炭製造所設備着手決裁（明治三十七年四月）

同年四月八日右閣議ニ基キ官房機密第六六九號ヲ以テ海軍煉炭製造所ノ諸設備ヲ左記ノ程度ニ依リ着手ノ儀海軍大臣ノ決裁ヲ經タリ

記

臨時軍事費、煉炭製造所設立費（目）

機械費　三三七、一〇五圓

採炭設備費　一一六、〇〇四圓

建築費　六一六、一二七圓

（註）

當時ニ於テハ戰時購買ノ英炭ヲ少クモ年額五十萬噸トシ之ヨリ約其ノ一割、五萬噸ノ粉炭ヲ生ズベク（此代價約百二十五萬圓）之ヲ煉炭化シテ實用品タラシムル丈ケニテモ既ニ充分設立ノ費用ヲ償フモノト認メラレタルナリ

海軍煉炭製造所設立委員ヲ置ク（明治三十七年四月）

四月十四日官房機密第七一三號ヲ以テ煉炭製造所創立ニ關スル一切ノ用務ハ特ニ海軍省ニ委員ヲ置キ之ヲ處理セシメラルヽコトヽナリ同月十八日左ノ通最初ノ海軍煉炭製造所設立委員ヲ命ゼラレタリ

委員長　中將　有馬新一（當時海軍艦政本部長）

委員　大佐　岩崎達人（同　海軍艦政本部第二部長）

同　機關大監　武田秀雄（同　部員）

同　同　中監　市川清次郎（同　　）

同　少佐　稻葉宗太郎（海軍採炭所長）

同　主計少監　名倉良三（海軍省經理局員）

同　技師　渡邊　讓　（臨時海軍建築部々員）
同　同　石橋　政信　ニ（海軍採炭所々員）

（後委員長ハ少將齋藤實ト交代、又石橋委員免ゼラレ機關少監水谷千萬吉、大機關士高津黄薇男、主計大監加藤八太郎、同少監笠松千代次、技師石田收、技師間宮伊賀次郎等委員ヲ命ゼラル）

長門炭山ヲ買收ス（明治三十七年四月）

之ヨリ先村上海軍省經理局長ハ長門無煙炭鑛株式會社ニ對シ長門炭田獻納ノ儀ヲ勸メタリシガ結局之ヲ買收スル事トナリ夫々手續ヲ經テ明治三十七年四月上旬一切ノ受授ヲ了セリ

（長門炭山ニ關スル記事參照）

主要機械ヲ佛國ニ註文ス（明治三十七年四月）

又煉炭製造機械ニ關シテハ前記官房機密第六六九號決裁ノ範圍ニ於テ其ノ主要ナルモノハ從來ノ研究調査ニ據リ佛國**ビエトリツクスレワレーヴ**會社ニ註文ノ方針ヲ決シ有馬艦政本部長ハ不取敢四月二十一日ヲ以テ在京ノ右會社代理人ト假契約ヲナシ更ニ其後我國內工業力ノ餘力乏シキ當時ノ實情ニ鑑ミ原動機ヲモ追加註文スルコトヽシ以テ時局ノ急ニ應ズルコトニ努メタリ而シテ六月二十七日右本契約ヲ締結セリ

（註）右外國製造ノ設備ハ九**キロ**煉炭每時二十五噸ノ煉結ニ適スル**コツフィナル**兩面壓搾機及原動機二臺、乾燥爐混和器等關聯諸裝置、竝ニ洗炭量每時四十噸ニ適スル洗炭機排滴器明治三十七年九月二十日迄ニ製造工場（煉炭機ハ佛國聖**ヱチエンヌシヤレシエール**工場洗炭機ハ西獨逸**ドルトマンド**市**シユツテルマンクレーメル**會社工場）ニ於テ竣工檢査ノ上貨車積込渡ノ事ニ契約セラレタリ

設立地ヲ山口縣德山ニ定ム（明治三十七年五月）

煉炭製造所ノ位置ニ關シテハ左記ノ意見ニ基キ山口縣德山町ヲ適當ト認メラレ設立委員ハ德山町長（貴族院議員野村恒造）等ト諸般ノ交渉ヲ進メタリ當時同地ニ於ケル工場用水ノ供給如何ハ重要ナル問題ノ一ツタリシガ地方民モ素ヨリ海軍ノ施設ヲ歡迎シ同地東川水源ニ依ル灌漑用水中一晝夜約七百屯ヲ分水シテ海軍ニ提供スルコトヲ諾シ當時水利事業ニ精通セル吉村海軍技師モ（佐世保經理部建築課長）調査ノ結果其ノ可能ナルヲ認メ茲ニ當局者ハ煉炭製造所建設ノ爲德山町ニ約一萬五千坪（地方ヨリ獻納ノ筈）及採炭事務所等建設ノ爲美禰郡大嶺村麥川ニ約九千坪（一坪約六十二錢）ノ敷地ヲ選定スルノ件ヲ仰裁シ明治三十七年五月二十日官房機密第六六九號ノ二ヲ以テ海軍大臣之ヲ決裁セリ次デ翌六月十日德山町ニ煉炭製造所事務所ヲ置キ建設ニ着手セリ

（註）其ノ後德山町ヨリ獻納ノ土地坪數ハ本文ノ豫定ヨリ增加シ二萬八千四百余坪（明治三十九年九月受領）トナレリ

煉炭製造所設立位置ニ關スル意見

海軍煉炭製造所ハ之ヲ大嶺村炭坑附近ニ設クルコト便利少カラズト雖調合用有煙炭及**ピッチ**運送ノタメ無益ニ運賃ヲ增加スルノ不利アルト洗炭後ノ不淨水河流ヲ濁スノ患アルヲ以テ之ヲ河口附近若クハ海岸ニ設置スルノ必要ヲ見ルニ至レリ候補ノ地トシテ各地中適當ト認メタルハ僅カニ左ノ三箇所ナリトス

一、厚狹驛附近厚狹川沿岸

一、小　月　驛

一、德　山　驛

海軍煉炭製造所ノ地位ハ出來ベクンバ海運ノ便アル港灣埠頭ニ設備スルヲ以テ幾多ノ利益アルハ論ヲ俟タズ煉炭ヲ各軍港ヘ積出シ及調合用若クハ焚料トシテ有煙炭及**ピッチ**採取ノタメ港灣ヲ控フルヲ以テ利益トスルハ明白ナリト雖ドモ厚狹驛附近ノ沿岸ハ盡ク遠淺ノ地ニシテ水尋不足ナキ最近ノ港灣ハ東德山カ又ハ西下ノ關ヲ措テ他ニ發見スル能ハザルナリ而シテ下ノ關ニ於テハ到底適當ノ地所ヲ得ルコト難キヲ以テ厚狹以西ニ在リテハ成ベク下ノ關ニ近ク選ビ各軍港ヘノ海運ノ便ハ全然下ノ關港ニ依ルノ外ナキナリ而シテ厚狹ハ河流ノ便アルモ地價ノ稍高價ナルト調合炭外**ピッチ**及燃料其ノ他ヲ下ノ關ヨリ輸送スルニ當リ其ノ費用增加スルノ不利アリ又厚狹下ノ關間ニ於テハ河流ヲ利用シ豐富ナル眞水ヲ得ントセバ小月ノ外適當ノ地ナシ（小月ハ滿潮時天候可ナレバ門司ヨリ海上運送ノ便ナキニアラズ然レドモ其ノ經濟上得ル處ハ下ノ關ヨリ陸運スルニ比シ極メテ些少ナリトス）故ニ厚狹以西ニ於テハ小月厚狹以東ニ於テハ德山ヲ可ト認ム

今小月、德山ノ兩地ヲ比較スルニ別紙ニ示シタル如ク土工費其ノ他初度ノ設備費ニ於テ德山ハ小月ヨリ約三千圓ノ多額ヲ要シ且ツ其ノ厚狹ヨリノ距離小月ニ比シ遙カニ增大スルヲ以テ原料無煙炭ノ鐵道運賃ハ著シク增加スルノ觀アルモ直接海運ノ便ヲ利用シ得ベキ良港ヲ有スルヲ以テ諸般ノ設備完成シ一ケ年拾萬噸以上ノ煉炭ヲ製スルニ至ラバ煉炭及調合炭若クハ**ピッチ**等ノ積込運搬荷揚ノ上ニ於テ利スルガ故ニ之ガ差額ハ僅々一ケ年五千圓ニ過ギザルナリ之レ卽チ煉炭一**トン**ノ製造費ノ上ニ於テ僅々五錢ノ增加タルニ過ギズ而シテ工場ニ連リ良港灣ヲ有スルト

山陽鐵道會社ヲ補助シテ大嶺支線ノ建設ニ着手セシム（明治三十七年五月）

否トハ經濟以外幾多ノ利益ヲ生ズベキヤ論ナシ

且ツ夫下ノ關ノ如キハ潮流急ニシテ到底良港灣ニアラズ且ツ商港トシテ船舶ノ出入頻繁之レヲ德山ノ灣内水深ク波靜ニ港内廣クシテ雜沓ノ患ナク危險絶無ナルニ比シ決シテ同日ノ論ニアラザルナリ故ニ軍需品製造所ノ位置トシテ德山ハ遙カニ小月ニ勝ル處アルヤ疑ヲ容レズ

採炭所ノ位置（省略）

別紙（省略）

之ヨリ先煉炭製造所設立ノ議内定セラルルヤ明治三十七年三月當時未ダ其建設位置確定ニ至ラザリシモ不取敢炭坑所在地麥川ト厚狹間石炭運搬ニ關シ山陽鐵道株式會社（社長松本重太郎）ト交渉ヲ進メ右支線ノ敷設ヲ急施セシムルコトトナレリ即四月海軍大臣命令書案ヲ交附シ會社ハ之ニ據リ急遽同月三十日株主總會ニ於テ之ヲ承ルコトニ決シ且ツ海軍ノ斡旋ニ依リ此ノ際特ニ簡捷ノ手續ヲ以テ五月下旬右敷設ニ對スル遞信大臣ノ假免許ヲ受ケ工事着手ノ準備ヲ進行セリ其ノ後間モナク前述ノ通煉炭製造所ノ位置ヲ山口縣德山ト決セラルルニ及ビ同年七月海軍大臣命令書ヲ定メ四月十八日附ヲ以テ同會社ニ交付シ會社ハ豫算金百二十九萬三千圓ヲ以テ工事ヲ急行スルコトトナレリ

山陽鐵道會社ニ對スル海軍大臣命令書

而シテ本鐵道ハ翌明治三十八年九月ヲ以テ開通セリ

海軍大臣命令書ノ内容左ノ如シ

命令書（明治三十七年四月十八日官房第三一五八號）

山口縣下長門國麥川厚狹間石炭ノ運搬ヲ山陽鐵道株式會社ニ請負シムルニ付左ノ如ク命令ス

第一條　山陽鐵道株式會社ハ下條ニ定メタル條件ニ依リ麥川厚狹間鐵道ヲ建設シ石炭ノ運搬ヲナスモノトス

第二條　麥川ニ於ケル停車場ノ位置並ニ麥川及德山ニ於ケル海軍省用地内ノ線路ハ海軍省ノ指示ヲ受ケ成ルベク石炭ノ輸送ニ便利ナル處ニ設クベシ

第三條　鐵道ノ建設及維持ニ要スル一切ノ費用ハ會社ニ於テ負擔スベシ

第四條　本鐵道ハ明治三十八年六月三十日マデニ落成セシムベシ

第五條　鐵道工事中補給トシテ總建設費ノ半額ニ對シ年六朱ノ割合ヲ以テ工事着手ノ日ヨリ落成ノ日ニ至ル期間ノ分ニ當ル金額ヲ工事落成ノ上支拂フモノトス

第六條　一ケ年石炭運搬ノ量ハ拾五萬噸以上トス若シ拾五萬噸ニ達セザルトキハ建設費ハ補

給トシテ運搬量參萬噸マデハ金八萬千四百圓ヲ支拂ヒ參萬噸以上ニ上ルトキハ此金額ヨリ壹萬噸ヲ增ス毎ニ金六千六百圓ヲ減ジタル額ヲ支拂フモノトス

第七條　石炭ノ鐵道運賃ハ壹噸ニ付壹哩金參錢五厘トス

但シ利益金ノ增減ニ依リ變更スルコトアルベシ

第八條　前條運賃ノ外發着手數料トシテ壹噸ニ付金貳拾錢ヲ支拂フモノトス

第九條　鐵道運搬ニ要スル貨車其他器具類ハ一切會社ノ負擔トス

第十條　本鐵道ニ依リ通常荷客ノ取扱ヲナスハ妨ナシト雖モ之ガ爲メ海軍用炭ノ運搬ニ支障若クハ遲延ヲ來スコトアルベカラザルモノトス

第十一條　毎年度ニ於テ要スル石炭運搬ノ量額及ビ第六條乃至第八條ノ金額ハ本命令ノ趣旨ニ基キ毎年度豫算ノ定ムル所ニヨリ煉炭製造所長ヲシテ毎年度ノ初メニ於テ之ガ契約ヲ締結セシメ其ノ支拂義務ハ該契約書ヲ以テ確定スルモノトス

（註）斯ノ如ク大嶺支線ハ當初特ニ補助金ヲ下附スルノ條件ニテ急設セシメタルモノナルガ戰役終了後ハ豫算上ノ關係モアリテ右命令書第六條ヲ左ノ通改メ之ヲ運賃ニ見込ムコトトセリ

第六條　一ケ年石炭運搬ノ量ハ十五萬噸以上トシ若シ十五萬噸ニ達セザルトキハ毎年度ノ初ニ於テ豫定スル出炭量ニ基キ第七條ノ運賃ノ割增ヲナスベシ但シ其運賃率ハ協定ノ上毎年度之ガ契約ヲナスモノトス

（三十八年十月官房第三九三三號）

次デ第七條第八條ヲ左ノ通改メタリ

第七條　石炭ノ鐵道運賃ハ百斤ニ付一哩一厘一毛トス

但シ利益ノ增減ニ依リ變更スルコトアルベシ

第八條　前條運賃ノ外發着手數料トシテ百斤ニ付金四錢ヲ支拂フモノトス

（三十九年二月官房第三一六號）

長門炭山出炭（明治三十八年）

而シテ長門炭山ハ別ニ記スガ如ク設立委員監督下ニ開鑿ヲ進メシガ斷層等ノ爲事業稍遲延シ翌三十八年度ニ及ビ始メテ約五萬屯ノ出炭ヲ見ルニ至レリ

煉炭機械ノ竣工及其輸送

外國註文ノ機械類ハ當時在英中ノ機關中監藤井光五郎主トシテ監督ニ任ジ三十七年十月五日製造地ニ於テ全部受領セリ當初本註文ノ機械ニ關シテハ佛、露、兩國ガ同盟ノ關係ニ在ルニ鑑ミ恰モ日露開戰ノ折柄受註會社ガ忠實ニ契約ヲ履行スレヤ否ヤニ關シ不安ナキ能ハズ深ク之ガ監

煉炭機械本邦到着（明治三十八年三月）

煉炭機械据付完了（明治三十八年四月）

督ニ留意セシメタルノミナラズ本邦ニ輸送ノ途中敵ニ押收セラルル等ノ事ナカラシムル爲高田商會ニ命ジ殊サラニ製造工場ヨリ一旦之ヲ英國ニ送リ發送人モ外人ノ名義トシ且煉炭機械タルコトヲ秘シ一般ノ鑛物洗淨及其煉結機械（銅、金、銀鑛用）トシテ取扱ハシムル等充分警戒スル處アリタリ

當時國内ニ在テハ益堆積スル英粉炭ヲ處分スル關係ヨリシテモ本機械ノ到來ヲ待ツコト切ナルモノアリシガ恰モ敵第二太平洋艦隊ノ出動ヲ報ゼラレシ折柄當事者ハ之ガ回送ニ多大ノ苦心ヲ拂ヒ遠ク南米ヲ迂回セシメ翌三十八年三月上旬漸ク德山ニ到着スルヲ得タリ又製造會社ヨリハ佛人**シャツピー**ナルモノ保證技師トシテ來朝セリ　而シテ機械ノ到着スルヤ創立委員以下現地職員ハ時局ノ急ニ應ゼンガタメ晝夜非常ノ努力ヲ盡シテ其ノ組立ヲ急ギ之ガ爲翌四月下旬ニハ早クモ第一煉炭機ノ据付ヲ了シ次デ一部作業ヲ開始スルニ至レリ　更ニ第二煉炭機ハ稍後レテ同年七月一日、又洗炭機械ハ建物ノ關係モアリテ翌明治三十九年二月ヲ以テ運轉ヲ開始セリ

（註）武田海軍中將後日談ニ依レバ當時歐洲ヨリ本機械ノ回送ニ付テハ敵艦隊ヲ避クルタメ大ニ苦心セル處ナリ乃チ敵ニシテ**スエズ**航路ヲ採ル場合ハ之ヲ避ケテ喜望峰ヲ迂回セシムベク又若シ敵ガ喜望峰ヲ迂回スル場合ハ**スエズ**航路ニ依リ回送セシムルコトニ計畫シツ

英粉煉炭製造ノタメ**ピツチ**ヲ輸入準備ス

ツアリシ處其ノ後敵艦隊ハ其ノ一部**スエズ**航路ヲ採リ一部ハ喜望峰ヲ迂回セントスルニ至リシ爲メ我煉炭機械ハ止ムヲ得ズ南米ヲ迂回シテ本邦ニ輸送スルコトトナレルモノナリト謂フ

之ヨリ先日露開戰直前當局者ハ開戰初期艦隊ヘ供給ノ英炭ヲ約五萬噸トシ内約二萬噸ノ粉炭ヲ生ズルノ見込ヲ以テ之ヲ煉炭ニ製造スル場合ノ準備トシテ三十七年一月**ピツチ**二千噸ノ購入ニ着手シアリシガ其後英炭ノ輸入ハ着々進行シ明治三十七年十二月迄ニ到着ノ見込額ハ既ニ五十萬噸ヲ超ヘントスルニ至レリ

而シテ之ヨリ生ズル粉炭ハ當時ノ狀況ニ於テ約一割五分ト豫想セラレシカバ三十七年九月海軍大臣ノ決裁ヲ經テ右粉炭煉製ノタメ更ニ**ピツチ**五千噸ノ輸入ヲ取計ヒ先ニ貯藏ノ二千噸ト合セ英粉煉炭製造ノ準備ヲナセリ

尙煉炭用**ピツチ**ノ供給ニ關シテハ原料炭供給ノ問題ト共ニ以前ヨリ當事者ノ大ニ苦心セル處ニシテ既ニ明治三十四年長門無煙炭鑛株式會社ノ煉炭企業ヲ指導セル當時農商務省若松製鐵所ヲシテ之ヲ副產セシムルノ儀ニ關シ調査スル處アリシガ機到ラズシテ其ノ儘トナレリ

今回愈々海軍煉炭事業開始ノ機運ニ際シテモ國内工業ノ狀況ハ其儘ニテハ到底近キ將來ニ充分

ピツチ生産ノタメ海軍豫算ヲ流用シテ製鐵所ニ新骸炭爐ヲ設備セシムル件閣議決定（明治三十八年五月）

ナル煉炭用**ピツチ**ヲ供給スルノ力ナシト認メラレタルニ依リ海軍當局ハ軍需ノ自給促進ノ見地ニ於テ之ガ製造ニ關シ農商務省當局ト協議スル處アリ

結局海軍ノ豫算ヲ移用シテ製鐵所ニ相當ノ設備ヲナサシムル事トナリ左ノ通請議ノ末明治三十八年五月十七日閣議ノ決定ヲ見タリ而シテ三十九年度ニ其設備ヲ完成シ翌年度ヨリ一ヶ年四千噸ヲ海軍ニ供給シ且ツ萬一民間ニ於テ海軍所要ノ殘額ヲ供給スルコト能ハザルトキハ製鐵所ハ其所要骸炭量ヲ最高ノ標準トシテ骸炭爐ヲ增設シテ**ピツチ**ノ副產ヲ增加スルコトニ協定シ且ツ價格ハ德山渡一噸十五圓トセリ

（註）戰役中輸入セル**ピツチ**ノ値段ハ一噸約五十圓ナリ

而シテ右製鐵所**ピツチ**ノ代價ニ關シテハ初メ製鐵所側ハ全設備費壹百參萬圓ノ元利償却ノ全部ヲ**ピツチ**原價ニ加算スルモノトシ一噸三十五圓ヲ要望シ海軍側ハ設備費中約七拾萬圓丈ケノ元利償却ヲ**ピツチ**ニ負擔セシムルモノトシ尙種々研究ノ末一噸十五圓以內ニテ充分余裕アリト認メ主ニ武田機關大監ヲシテ製鐵所ト交渉ニ任ゼシメ又本省ニ於テモ大藏省ニ協議ヲ進ムル處アリ結局前記ノ如ク協定ヲ見ルニ至レルモノナリ

明治三十八年五月農商務大臣、海軍大臣連署ヲ以テ閣議稟請、五月十七日內閣批第七號ヲ以テ

請議ノ通決定

煉炭用**ピツチ**製造ニ關スル件

今般海軍省ニ於テ煉炭製造場ノ新設ト共ニ之ガ原料トシテ一ヶ年八千噸以上ノ**ピツチ**ヲ要スルコトヽ相成候ヘ共民間ニ於テハ此需用ヲ充タスコト能ハザルヲ以テ農商務省所管製鐵所ニ於テ骸炭製造ノ傍**ピツチ**ヲ製造シ之ヲ供給セシムルハ軍事上及國家經濟上頗ル須要ノ儀ニ有之候處從來製鐵所ノ骸炭工場ニ於テハ**ピツチ**ヲ採集スルノ設計ニ相成居ラザルニ付更ニ副產物トシテ**ピツチ**製造ノ骸炭工場ヲ新築シ以テ煉炭用**ピツチ**ノ供給ヲナサシメ度而シテ該工場新設費ハ總額金百參萬五千八百圓ニシテ其新設ハ最モ急ヲ要シ候ニ付海軍省所管臨時軍事費ヲ分割シテ之ガ財源ニ充テ施行候樣致度尤今回要求ノ新設工場ニテハ一ヶ年約四千噸ノ**ピツチ**ヲ製造スルノ設計ニシテ殘額約四千噸ノ不足ハ之ヲ民間ニ取ルノ見込ニ候ヘ共將來民間ニ於テ此不足額ヲ供給スル能ハザルトキハ製鐵所ハ更ニ一層副產物製造ノ骸炭爐ヲ增築シ其使用骸炭ノ全部ヲ骸爐ニ依テ製造スルコトヽシ之ニ伴ヒ以テ**ピツチ**ノ生產額ヲ出來得ル限リ增加供給スルノ方針ヲ執リ候樣致度此段至急閣議ヲ請フ

ピッチ採集**ソルベー**式骸炭爐百八基建設豫算

金七拾貳萬圓　骸炭爐百〇八基、副産物工場汽罐煙突等一式

金壹萬七千圓　**アンモニヤ**水輸送管及蒸汽輸送管

金五、萬　圓　洗炭運搬裝置一式

金拾六萬圓　**コールター**蒸溜工場一式

金壹萬六千圓　**コールター**運搬用**タンクカー**四臺

金八　千　圓　**コールター**運搬用鐵道布設

金六萬四千八百圓　**ソルベー**會社特許料（一爐ニ付六百圓）

合　計　金百參萬五千八百圓

（註）斯ノ如クシテ製鐵所ハ新ニ副産物骸炭爐ヲ急設シ明治四十年度ヨリ海軍ニ**ピッチ**ヲ供給スルコトトナリ其ノ後大正四年度迄ハ本文協定價格タル金十五圓ヲ以テ納入セラレシガ大正五年度ヨリハ金二十二圓トナレリ其ノ事情詳ナラザルモ蓋シ此頃ハ歐洲大戰ニ由ル時局ノタメ海軍煉炭ノ製造モ年額三十萬噸前後ニ急增シ製鐵所ヨリ納入ノ**ピッチ**ノ額モ遙カニ協定ヲ超過スルニ至レルコト竝當時一般炭價運賃等暴騰ノ結果ニ由ルモノト認ム尙ホ大正五年度ハ煉炭ノ增産ニ伴ヒ最モ**ピッチ**ノ蒐集ニ困難セル時代ニシテ殊ニ夏期ニ至テハ煉炭製造所ニ於ケル**ピッチ**貯量僅々數日分ニ過ギザルコトアリ爲ニ吳工廠製鋼部ヨリ少量ノ粗製**ピッチ**ヲ保管轉換スル等當事者ノ苦心大ナルモノアリ

臨時海軍煉炭製造所條例（明治三十八年四月）

海軍ニ於テ煉炭製造所設立ノ議進ムヤ明治三十七年四月日本煉炭株式會社々長小野金六ハ海軍ニ陳情書ヲ提出シ將來官業トノ併立困難ナルベキヲ訴ヘ此際同社全部ヲ官ニ買上ゲラルヽカ又ハ將來ニ對シ相當量註文ノ內命ヲ受ケ以テ其ノ業ニ安ジタキ旨ヲ請願セシガ齋藤海軍次官ハ之ニ對シ海軍煉炭製造所ノ設立ハ軍事上ノ必要ニ基クモノナル處之ヲ以テ煉炭事業ヲ官ノ專營トナスノ儀ニアラザルヲ以テ會社施設ノ買收ヲナシ難シ尤モ引續年々相當量註文ノ要ハ可有之旨回答セリ

明治三十八年四月十四日內令第二二一號ヲ以テ臨時海軍煉炭製造所條例發布同日官房第一四一四號ヲ以テ其本部及煉炭部ヲ山口縣德山ニ採炭部ヲ同縣大嶺ニ置カル同月二十五日官房第一五九三號ヲ以テ從來ノ海軍煉炭製造所事務所ヲ臨時海軍煉炭製造所ニ改メラル又同日左ノ通初代各職員ニ補セラル（爾後ノ異動ハ記錄ヲ省略ス）

所長兼煉炭部長　機關大監　武田秀雄

煉炭製造ニ付決裁（明治三十八年四月）

煉炭部部員　機關中監　水谷千萬吉
採炭部長　機關少監　貞永勘五郎
煉炭部部員　大機關士　高津黄徴男
軍醫長　大軍醫　矢野恭三
主計長　主計少監　石本久萬男
採炭部部員　技師　間宮伊賀治郎

斯ノ如ク諸般ノ準備漸ク成ルニ及ビ齋藤海軍艦政本部長ハ三十八年四月煉炭製造ニ關シ左ノ通海軍大臣ノ決裁ヲ經タリ

明治三十八年四月十七日官房機密第四五六號決裁

別紙調書ノ金額以内ヲ以テ臨時軍事費艦營費支辨ニテ本年度ニ於テ長門炭山ヨリ石炭凡參萬參千噸ヲ採掘シ曩ニ官房第三四九號ノ二ヲ以テ煉炭製造所設立委員長ヘ採掘方御認許相成タル七千噸ヲ合セ都合四萬噸ヲ煉炭ニ製造シ及ビ購買英炭ヨリ生ズル粉炭豫定量凡六萬噸ヲ豫テノ御方針ニ依リ漸次煉炭ニ改造シ各工廠需品庫ニ於ケル準備供給ノ緩急ニ依リ海軍艦政本部長限リ直ニ配炭セシムルコトニ取計度此段仰高裁候也

煉炭製造開始（明治三十八年）

主トシテ英粉煉炭ノ製造ニ從事ス

（別紙省略ス）

右決裁ニ基キ海軍艦政本部長ハ同四月二十五日艦本第一四一一號ニ依リ先以テ英粉炭參萬噸ヲ第一種煉炭ニ製造ノ件臨時海軍煉炭製造所長ニ通達シ茲ニ愈海軍煉炭事業ノ開始ヲ見タリ

次デ三十八年七月殘リ三萬噸ノ英粉炭ヲ煉炭ニ製造方發令セラル而ルニ臨時軍事費支辨ニ依ル購入英炭ノ額ハ同年九月既ニ八拾萬噸ニ達シ之ヨリ生ズル粉炭ノ量莫大ナルガ爲爾後モ引續キ臨時軍事費支辨ヲ以テ屢々英粉煉炭ノ製造ヲ訓令セラレタリ又戰役開始以來艦艇用トシテ購入セル米國**ポカホンタス**炭約三萬噸モ殆ド全部粉炭ナリシヲ以テ認許ヲ得テ之ヲ長門煉炭調合用トシテ利用セリ

斯ノ如ク煉炭製造所創業ノ初メニ豫テノ計畫通多クハ英米炭ヲ原料トシテ優良ナル煉炭ノ製造ニ忙殺セラレ殊ニ英粉炭ニ至テハ戰時購入ノ分ノ外旅順ニ於ケル戰利英炭ノ選別整理ニ依リ生ジタルモノモ不尠戰後ニ於テモ引續キ之ヲ煉炭ニ化製シ明治四十一年八月マデニ煉炭原料トシ各需品庫等ヨリ煉炭製造所ニ保管轉換セル英粉炭ハ二十九萬五千余噸製造濟ノ第一種煉炭既ニ二十萬八千噸ヲ算シ尚ホ土砂混入ノ原料ハ之ヲ第二種煉炭ノ調合ニ供スル等夫々利用ノ途ヲ講ジ豫期以上ノ成績ヲ擧ゲ遙ニ設立ノ費用ヲ償フテ餘アルコトヽナレリ

海軍煉炭製造所條例（明治三十九年一月）

（註）英粉煉炭ノ製造ハ明治四十二年度迄ニ合計二十七萬噸ヲ超ヘ其後モ引續キ少量ノ製造ヲナセルコト別ニ表示スル處ノ如ク最初ヨリ大正五年度マデ第一種煉炭タル英粉煉炭ハ合計二十九萬一千五百余屯ニ達セリ

明治三十八年十二月勅令第二八三號ヲ以テ海軍煉炭製造所條例ヲ定メ三十九年一月一日ヨリ實施セラル本條例ニ於テ海軍煉炭製造所ハ海軍艦政本部ニ屬シ本部、採炭部、煉炭部ヲ置キ長門海軍炭山ヲ管轄シ採炭竝煉炭ノ製造及供給ニ關スルコトヲ掌ルコト其他ヲ定メラル

明治三十九年十一月達第百四十六號ヲ以テ海軍煉炭製造所採炭製造規程ヲ定ム本規程ニ於テ採掘炭ヲ上等炭（煉炭原料タルモノ）下等炭（工業用）ニ煉炭ヲ第一種煉炭（錨形刻印ヲ附ス）第二種煉炭（波形刻印ヲ附ス）第三種煉炭（櫻花形刻印ヲ附ス但シ廢炭利用ノ目的ヲ以テ臨時製造ス）トスルコト其他ニ付規定ス

（註）爾後之等諸例規ノ改廢ニ關シテハ重要ナルモノヽ外之ガ記錄ヲ省略ス

之ヨリ先明治三十九年五月伊集院海軍艦政本部長ハ煉炭製造設備增加ニ關シ左ノ通仰裁

同月官房第一七〇二號ヲ以テ海軍大臣ノ決裁ヲ經タリ

○煉炭機械增設（明治四十年竣工）

海軍煉炭製造所ハ別紙ノ通臨時軍事費ヲ以テ煉炭機械及ビ原動機等竝ニ之ニ要スル建築物增設ノ事ニ取計可然哉此段仰高裁候也

（理由）

目下製造力ノ最大限度ハ一箇年約拾貳萬噸トス而シテ來四十年度ニ於テハ長門炭約十萬噸四十一年度ニ於テハ同炭約十二萬噸ノ製造ヲ要スレバ同所煉炭機ハ長門煉炭製造以外ニ餘力ナシ然ルニ戰時購買セシ英炭選別ノ結果生ズル處ノ英粉炭ノ現況ハ左記ノ如クニシテ約三十萬噸ニ達スルアリ此多量ノ粉末ヲ生ズルハ英炭其ノモノヽ炭質上自然ノ數ニシテ又如何トモ致シ難ク然ルニ艦艇機關ノ構造上總テ選別供給ノ已ムヲ得ザルニ出ヅ而シテ之等粉炭タル今日ノ處格納スベキ相當炭庫ノ設備ナク加之粉炭ヲ其儘ニ委スルモ到底使用ノ見込ナク又石炭ハ總テ風化變質ヲ免レズシテ粉炭ニ在テハ特ニ甚シク且自然發火ノ虞多シトス飜テ之ヲ煉炭ニ改造スルニ於テハ優ニ第一種炭トシテ軍用ニ適スルノミナラズ保管上至便ニシテ保存上亦經年風化變質ノ患少ク經濟上軍事上多大ノ得策ト信ズ如斯ナルニ依リ今日迄已ニ英粉炭約十三萬噸ヲ煉炭ニ改造方決裁ヲ得タルニ依リ今後改造ヲ要スル量額ハ約十七萬噸トス而シテ煉炭機械一基ノ增備ニ依リ全粉炭ノ改造ハ約三ケ年間ヲ要スベク其費用

ハ製作費（ピッチ代共）及運搬費（製造所ヨリ需品庫ヘノモノ）一噸ニ付七圓六十五錢總額百三十五萬圓トス

右ノ通ニシテ煉炭製造力ヲ伸張スルハ今日ニ於テ實際上必要ヲ感ズルノミナラズ假令英炭改造結了ノ後ト雖モ敢テ無益ノ設備ニアラズ　卽煉炭製造所現在ノ製造力ハ僅ニ現在艦艇用炭量ノ半額ヲ製造スルニ足ルノミナリ

右ノ如ク而テ今日如斯多大ノ粉炭ハ本戰役ニ關スル所謂後始末トシテ處理スベキモノナルニ依リ本件經費ハ臨時軍事費ヲ以テ處辨スベキ筋ト認ム又四十年度以降ニ於ケル英粉炭ノ煉炭ニ改造スル費用ハ毎年度英炭新陳代謝ノ必要上其幾分ヲ艦艇ニ使用セシメラルル主旨ナルニ依リ爲ニ第二種和炭購買費ヲ流用支辨シ得ベキ見込ナリ

海軍煉炭製造所煉結工場增設概算書

二三、五八五圓　　工場建增（內譯省略）

一一四、〇〇〇圓　　煉炭機械及原動機等（內譯省略）

（煉炭機ハ初度設備ノモノト同式）

各地英粉炭ノ狀況（省略）

而シテ右增備機械ハ翌明治四十年五月竣工シ玆ニ三臺ノ角型煉炭機及附屬裝置ヲ整備スルニ至レリ

第三章　海軍煉炭事業

第二節　海軍煉炭製造所擴張及其後ノ狀況

明治三十七八年戰役後ハ我海軍ニ於テモ漸次重油燃料ヲ採用スルニ至リシガ艦艇ノ增加ニ伴ヒ煉炭ノ需用モ益々增加シ海軍煉炭製造所ノ海軍製煉炭及日本煉炭株式會社ノ天草煉炭ヲ購入供給セリ然ルニ煉炭ノ主要原料タル無煙炭ニ關シテハ別ニ述ブルガ如ク天草炭ノ炭量炭質ハ依然充分ナラズ海軍製煉炭ノ原料タルベキ長門炭モ掘進ニ伴ヒ其品質當初ノ如ク良好ナラズシテ第一種炭ノ製造ニ適セザルニ反シ朝鮮平壤炭ハ別ニ記スガ如ク逐次其優良ナルコトヲ認メラレ數次ノ實驗ヲ經テ明治四十二年本炭ヲ以テ第一種煉炭ノ製造ニ成功シ翌四十三年度ヨリハ平壤炭ヲ原料トスル第一種煉炭ノ大量製造ヲ開始セラルルニ至レリ

平壤炭ヲ以テ第一種煉炭ヲ製造ス（明治四十三年）

之ガ爲大嶺炭鑛ハ積極的採掘ヲ見合セ第二種煉炭原料トシテ相當量ヲ出炭スルノ程度ニ止メラレ又日本煉炭株式會社ニハ爾後第二種煉炭ノミヲ製造セシメラルヽ事トナレリ

斯ノ如ク海軍ノ煉炭事業ハ平壤炭ノ採用ニ依リ初メテ原料資源ヲ將來ニ確保スル事トナリ別ニ述ブルガ如ク朝鮮總督府ヲ促シ平壤鑛業所ノ擴張整備及同炭田ノ保留等ニ努メタリ

大嶺炭鑛ハ別ニ記スガ如ク大正四年一旦近ク廢坑ノ方針ヲ決セラレシガ歐洲戰ニ依ル炭界事情ノ變調ニ會シ一時廢坑ヲ見合セ其儘經營ヲ繼續スルコトトセリ（戰後市況ノ概ネ舊ニ復スルニ及ビ大正十一年度末ヲ以テ廢坑ノ處分ヲ了セリ）

谷口煉炭工場設立（明治四十年）

煉炭ノ製造上原料洗滌ニ當リ生ズル滓炭ノ處分ニ就テハ事業開始以來一般競爭ニ依リ拂下グルヲ原則トセシガ其頃ハ之等滓炭利用ノ途安定セザリシタメ確實ナル拂受人ニ乏シク稍モスレバ滓炭ハ構內ニ堆積シ遂ニ官自ラ費ヲ投ジテ之レヲ海中ニ投棄處分スルノ外ナキニ至ルベキ狀況ニ在リ此間廣島縣谷口節ハ右滓炭ノ拂下ヲ受ケ之ヲ原料トシテ一種ノ稀煙煉炭ノ製造ヲ企テ明治四十年資本金十數萬圓ヲ投ジ煉炭所隣接ノ地ニ煉炭工場ヲ新設シ既ニ其成績見ルベキモノアリ海軍煉炭製造所ニ於テモ焚料炭ノ一部ニ之ヲ採用スルニ至レリ、是ニ於テ明治四十二年十二月海軍煉炭製造所長ハ海軍省經理局トモ打合セノ上一般競爭ニ依ラズ隨意契約ヲ以テ同人ニ滓炭拂下ヲナスコトトセリ而ルニ谷口ハ右稀煙煉炭ノ販路ヲ一般市場ニ開拓センコトヲ期シ之ガ爲ニ原料滓炭ヲ相當年間ニ亘リ隨意契約ニ依リ拂下ラレ度旨出願セリ官ハ右滓炭ガ圓滑ニ處分セラルルト否トハ海軍ノ事業經營上ニ影響大ナルモノアルニ鑑ミ煉炭製造所長上申ニ基キ詮議ノ末往年御德海軍炭鑛採掘請負人ニ與ヘタル例ニ倣ヒ海軍艦政本部長ハ明治四十三年三月右谷

谷口工場ニ第二種煉炭ノ製造ヲ委託ス（明治四十三年度ヨリ）

白節ニ對シ「海軍煉炭事業繼續中ハ如何ナル場合ニモ洗滓炭ヲ引取ルベキコトノ一項ヲ含ム命令書ヲ交付シ引續キ滓炭ヲ同人ニ拂下グルコトトセリ

（本拂下ハ後日大正三年之ヲ廢シ滓炭ハ官ニ於テ一部ハ棄却シ一部ハ工場燃料トシテ利用スルコトトナレリ）

其後豫テ歐米出張中ノ永積海軍技師歸朝シ長門炭選別法ニ改善ヲ加ヘタル結果從來同炭洗滌ノタメニ生ズル減耗ノ大部分ヲ防止スルコトヲ得之ガ爲四十三年度ニ於テハ原料ニ大ナル剩餘ヲ生ズルニ至リシガ恰モ同年度內煉炭部ノ余力充分ナラザリシタメ認許ヲ得テ右長門炭ヲ原料トシ第二種煉炭約五千噸ノ製造ヲ谷口工場ニ委託セリ

又一方平壤炭其他原料ノ使用增加ニ伴ヒ洗滓炭ノ量モ年額一萬數千噸ニ上ルベキ狀況ニ在リテ之ガ處置ニ關シテハ豫テ研究中ノ處右滓炭中泥炭ハ第二種煉炭原料トシテ利用ノ見込アリ又谷口工場煉結機ハ構造上之等水分夥多ノ原料ヲ煉結スルニ適當ナルガ爲明治四十四年一月海煉機密第四號上申ニ基キ四十四年度ニ於テ同工場ヲシテ右泥炭ヲ原料トセル海軍第二種煉炭ヲ製造セシメタリシガ之等委託ノ成績ハ概ネ良好ナリシヲ以テ以後毎年度第二種煉炭若干ノ製造ヲ委託シ茲ニ同工場ノ能力ヲ軍用煉炭ノ製造ニ利用スルコトトナレリ

煉炭製造所擴張ノ詮議（大正三年）

然ルニ一面同工場ハ官ノ工場ト接續ノ位置ヲ占メ原料、製品ノ貯藏運搬等作業上海軍工場トノ關係密接ニシテ兩工場間ニ問題ヲ起シ易キ煩アリシガ後次ニ述ブルガ如ク煉炭製造所擴張ノ機會ニ於テ整理、統制上之ヲ官ニ買收セラルルニ至レリ

大正三年五月海軍艦政本部第二部長鈴木富三ハ海軍煉炭製造所擴張ニ關スル意見ヲ伊地知海軍艦政本部長（季珍）ニ提出セリ本意見ニ於テ同官ハ當時出師準備石炭ノ貯藏額ハ漸ク規定ノ六十五萬噸ニ達セリト雖モ之レ僅ニ戰時半ケ年ノ所要ヲ充タスニ足ルノミ而シテ國內（平壤鑛業所ノ分ヲ省ク）ノ煉炭製造能力ハ戰時ノ場合海軍十五萬噸谷口工場七萬噸、日本煉炭株式會社八萬噸合計三十萬噸ニ過ギズ又平時ノ場合ハ右官私工場ノ合計能力約二十四萬噸ニシテ今後艦艇ノ增加ニ伴ヒ三、四年ヲ出デズシテ供給不足ニ至ルベキ狀況ニアリ依テ經費約八十萬圓ヲ投ジ煉炭製造所ノ能力ヲ倍加シテ戰時三十萬噸トシ且制度整理上谷口工場ヲ官ニ買收併合シ官民工場ノ煉炭製造能力ヲ戰時合計四十五萬噸タラシムルヲ要スト云フニ在リシガ當時政府財政ノ狀況ニ於テ新規要求ノ成立ニ大ナル困難ヲ豫期セラルル折柄之ガ財源詮議ニ關シ部內ニモ諸說アリテ決セズ同年八月突如歐州大戰起リ次デ帝國之ニ參加スルヤ戰時行動ニ伴フ煉炭ノ需要增大シ煉炭製造所ノ擴張益々其必要ヲ認メラルルニ至リシヲ以テ艦政本部當局者ハ更ニ平塚海軍

煉炭製造所長ノ工場擴張計畫書ヲ徵シ詮議ヲ進ムル處アリ次デ同十二月水谷海軍艦政本部部員亦擴張意見書ヲ提出スル等實現ノ機運漸ク熟シ遂ニ大正四年三月村上海軍艦政本部長（格一）ハ左ノ通提案海軍大臣ノ決裁ヲ經テ直ニ艦本機密第三七三號ヲ以テ之ガ詳細計畫ヲ海軍煉炭製造所ニ訓令セリ

煉炭製造所能力增加ノ件決裁（大正四年三月）

大正四、三、一三　官房機密第三三五號　決裁

海軍煉炭製造所製造力增加ニ關スル件

本戰役ニ關シ既ニ消費シ又現ニ消費シツツアル艦艇ノ行動用燃料補充ハ今後ニ於ケル艦艇ノ行動上緊急ナルノミナラズ戰局ノ將來ヲ豫測シ能ハザル今日ニ於テ一日モ忽ニスベカラザルハ論ヲ俟タズ然ルニ現今煉炭製造所ノ製造力ハ乍遺憾完全ナル補充ヲ爲スニ足ル能力ヲ有セズ又戰局ノ關係上外國炭ノ供給ヲ受クルコトモ頗ル困難ニシテ結局煉炭製造ノ製造力ヲ增加スルニ非ルヨリハ他ニ應急ノ方法ナク且又之ガ財源ハ臨時軍事費ニ依ルノ外ナシト信ジ補充炭量ニ影響ヲ及ボサザル程度ニ於テ有效ナル製造力增加ノ財源ヲ得ベク豫テ精査中ノ處幸ニシテ臨時軍事費中差繰リ得ベキ五十二萬百五圓ノ財源ヲ得タレバ左ノ通擴張ヲ實行致度谷口

煉炭製造所ハ擴張ニ伴フ操業上ノ必要ハ云フ迄モナク自營ニ伴フ有利ノ關係上本擴張ノ一部トシテ買收ヲ要スルガ故ニ本擴張ハ自然豫テノ懸案タル同所問題ヲモ併セテ解決スル所以ナリ

右ノ擴張ハ前述ノ如ク差繰リ得ベキ財源ヲ目途トシタル應急ノ設備ニシテ燃料ノ完全ナル獨立ヲ期スルニハ他日相當ノ豫算ヲ得テ更ニ實行致度

一、擴張ニ要スル豫算總額

七六、〇〇〇圓	谷口工場買收費
二二、〇〇〇圓	土地買收費
二八三、八〇五圓	增備機械及器具費
一三七、九〇〇圓	土木建築費
計　五二〇、一〇五圓	

一、擴張ニ伴フ煉炭製造力ノ增加拾參萬七千噸現今ノ製造力拾七萬噸ト併セテ設備完成後參拾萬七千噸ノ製造力ヲ得

右仰高裁

（參考）

臨時軍事費ヲ差繰リ擴張ヲナスモ準備量額ノ補充上何等ノ影響ナキノミナラズ英炭ノ購買數量ヲ減ジ煉炭ヲ以テ之ニ代ユルノ結果豫算上却テ幾分ノ餘裕ヲ生ズルコトトナルベシ其ノ計算左ノ如シ

(イ) 谷口煉炭製造所ヲ買收自營トナセバ一噸ニ付製造費一圓七十九錢五厘ヲ節シ得ルノ結果八萬噸ニ付每年十四萬三千六百圓ノ餘裕ヲ生ズ

(ロ) 一萬二千噸ノ寄贈英炭ヲ時價ニ見積レバ約三十三萬六千圓トナル

(ハ) 補充ヲ要スル英炭二萬噸中五千噸ヲ煉炭ニ代ユルニヨリ英炭代ト煉炭代トノ差額六萬五千圓

以上三口　合計五十四萬四千六百圓

（註）右寄贈英炭トハ當時我國ト對獨共同作戰ノ關係ニアリタル英國ガ其海軍用トシテ同國海軍運送船ヲ以テ東洋ニ輸送シ來レル英炭二隻分ヲ先方ノ都合上寄贈ヲ申出デ大正四年一月五日佐世保ニ陸揚受入レタルナリ實量一二、五三九噸

而シテ右臨時軍事費艦營費支辨ヲ以テ海軍煉炭製造所擴張竝ニ谷口煉炭工場ヲ買收スルノ件ニ

臨時軍事費ヲ以テ煉炭製造所擴張ニ付會計檢査院ト應答（大正四年）

就テハ豫メ會計檢査院ト諒解ヲ遂グルノ至當ナルヲ認メラレ大正四年三月志佐海軍省經理局長ハ中隈會計檢査院部長ト左ノ通應答スル處アリタリ

大正四年三月志佐海軍省經理局長ヨリ中隈會計檢査院部長ヘ照會

海軍煉炭製造所擴張ノ件　（經機密第十二號）

今回ノ戰役ニ關シ已ニ消費シ若クハ現ニ消費シツツアル艦艇燃料ノ補充ハ今後ニ於ケル艦艇行動上緊急ニシテ戰局ノ將來ヲ豫測シ能ハザル今日ニ於テ一日モ忽ニスベカラザルハ論ヲ俟タズ然ルニ海軍煉炭製造所及民間工場ノ煉炭製造力ハ之ガ完全ナル補充ヲナスニ足ル能力ヲ有セズ又外國炭ヲ購買セントスルモ獨リ甚ダ不廉ナルノミナラズ戰局ノ關係上事實頗ル困難ニシテ結局海軍煉炭製造所ノ製造力ヲ增加スルノ外他ニ應急ノ方法ナキニ付此際臨時軍事費中燃料調辨ノ豫算ヲ差繰リ同所ノ設備ヲ擴張スルコトハ軍事上竝ニ經濟上最緊要トスルトコロナリ而シテ隣接谷口工場ハ本件擴張ニ伴ヒ操業上ノ便否竝ニ經濟上ノ得失ニ鑑ミ併セテ之ヲ買收シ豫テ貴院御來示ノ問題ヲモ解決スルコトヽ致度

右ニ要スル經費ハ臨時軍事費約金五拾萬圓ニシテ之ニ依リテ增加スベキ製造力ハ年額約拾四

萬嚬トス而シテ理想ニ達セザルコト尚ホ遠シト雖經費ノ關係上暫ク實行シ得ル程度ニ止ムル次第ナリ

右ニ關シ事前一應御意見承知致度

右ニ對シ同月三日中隈會計檢査院第二部長ノ回答左ノ如シ

本月三日經機密第拾貳號ヲ以テ海軍煉炭製造所擴張ノ件ニ付御照會ノ趣了承右ハ大體ニ於テ已ムヲ得ザルノ施設ト被存候處隣接私設工場買收價格ノ査定等ニ就テハ御參考迄ニ本官ノ希望ヲ久野主計大監ヘ詳悉致置候條篤ト御了知相成度御答旁爲念此段申添候也

（註）右中隈檢査院部長談話ノ要領ハ臨時軍事費ヲ以テ谷口工場ヲ買收スル點ハ檢査院ノ會議ニ於テ大分異論アリタリ其ノ要旨ハ同工場ノ買收ハ德山擴張問題ト分離シテ他日ノ別詮議トスルヲ至當ナリトスルニ在リ結局中隈部長ノ意見ニ依リ海軍ノ來示通操業上及經濟上得策ナルヲ以テ同意スル事ニハ議決シタルモ若シ買收ノ價格不廉ナルニ於テハ他日再問題ノ種トナリ累ヲ生ズルノ虞ナキニアラザルヲ以テ此際充分愼重ナル査定アランコトヲ希望スト云フニ在リ而シテ此後翌年三月ニ至リ本件豫算ノ增額製造能力ノ增加等ニ關シ更ニ檢査院ニ協議ヲ遂ゲタリ

谷口工場ノ買收（大正五年三月）

斯クテ大正四年五月官房機密第六六八號ヲ以テ谷口工場買收ノ件ヲ吳鎭守府司令長官ニ訓令セラレ同七月五日吳海軍經理部長ハ谷口ト賣買契約ヲ締結之ニ基キ翌大正五年三月二十日受授ヲ完了セリ

買收價格左ノ如シ

金一〇、八〇八圓	土地五、四〇四坪		
金一八、〇九九圓	營造物		
金五一、〇九三圓	機械器具及附屬物		
合計　金八〇、〇〇〇圓			

角形、豆形兩種煉炭ノ試驗（大正四年）

煉炭ノ型式ニ關シ從來ノ角型煉炭ハ投込搭載ノ場合ノ容積大ナル爲航續力ノ減少ヲ來タス事又碎炭ノ煩勞甚大ナル等ノ缺點アリテ豫テ之ガ對策ニ就キ考究セラレアリシガ大正三年九月島村海軍軍令部長ハ海令機密第三一五號ヲ以テ右ニ關スル中里軍令部參謀ノ意見ヲ添ヘ此際丸型煉炭試製實驗ノ儀ヲ海軍大臣ニ商議セリ然ルニ丸型煉炭ニ付テハ往年天草煉炭ノ時代ニ之ヲ製造セシメ試用ノ結果餘リ好評ナラザリシ經驗モアリ其後ノ實用ニ於テモ一得一失アリテ今回煉炭製造所擴張着手ニ當リテハ尙ホ充分兩型式ニ就キ實驗比較ヲ要スルモノアリ乃チ大正四年三月

○角、豆、兩種煉炭ノ比較試驗豆形ヲ推稱ス

官房第七九七號ヲ以テ之ガ實驗實施方ヲ第一艦隊司令長官ニ訓令セラレタリ次デ同年五月加藤第一艦隊司令長官（艦隊機關長秀島熊六）ハ其ノ實驗成績ニ就キ左記要旨ノ報告ヲナセリ

角形、豆形煉炭比較試驗成績

（大正四年五月第一艦隊司令長官加藤友三郎報告）

大正四年三月二十四日以後同五月十三日ニ至ル期間ニ當隊軍艦、攝津、河內、比叡、金剛、及驅隊艦櫻、橘、ニ於テ施行セシ角形煉炭及豆形煉炭比較試驗ノ成績ヲ綜合セバ左ノ如シ

一、搭載力量ノ比較

豆形煉炭ノ搭載力量ハ角形煉炭ニ比シ遙ニ少ニシテ角形ノ搭載量一ニ對シ足場裝置ニ依ル場合ニハ約二分ノ一、デリツク裝置ヲ以テスル場合約四分ノ三ナリ

二、搭載ノ難易比較

石炭船內及上甲板ニ於ケル作業ハ豆形煉炭ノ方遙ニ困難ナルモ炭庫內ニ於ケル作業ハ全然之ニ反シ頗ル容易ナリ

又角形ノ搭載ニ方リテハ每回數名ノ負傷者ヲ出スヲ常トスルモ豆形煉炭ノ場合ニハ殆ド皆無ナリ

三、罐前及庫內繰出シ及搬炭ノ難易

豆形ハ角形ニ比シ操炭、搬炭共遙ニ容易ニシテ毫モ危險ノ惧ナク頗ル有利ナリ

四、投込方法ニ依リ搭載セル兩種炭ノ搭載容量

豆形ノ方有利ニシテ一般ニ公定容量若クハ其以上ニ搭載シ得ベキモ角形煉炭ニ於テハ約八〇%ヲ搭載シ得ルニ過ギズ驅逐艦ノ如ク炭庫ノ狹隘ナルモノニ於テハ角形煉炭ノ不利殊ニ大ナリ

五、碎炭能力ノ決定及碎炭ノ狀況

豆形ハ全然碎炭ノ要ナキノミナラズ之ヲ破碎スルトキハ粉末トナリ且ツ碎炭頗ル困難ナリ角形ハ一人一時間ニ付短時間ナラバ約一、三噸ヲ碎炭シ得ルモ長時間ノ航海ニテハ約一噸ナリ

六、兩種炭使用ノ場合所要人員

豆形煉炭使用ノ場合ニハ全然碎炭員ヲ要セズ且ツ庫內ニ於ケル操炭頗ル容易ナルヲ以テ角形使用ノ場合ニ比シ大ニ所要人員ヲ減少シ得ベシ

七、石炭搭載後石炭ニ殘留セル粉炭ノ多寡及庫内並罐前ニ於ケル（碎炭ヲ終リ罐ニ投入スル前）粉炭ノ多寡比較

粉炭ノ量ハ搭載後石炭船内ニ殘留セルモノ並投炭前罐前ニ於ケルモノ共ニ豆形ノ方僅少ナリ

八、一晝夜以上連續使用シ得ベキ最大燃燒度

兩種炭共ニ大差ナク何レモ軍艦ニ於テハ宮原罐約十六瓩内外ヤロー罐約十八瓩内外ヲ最大トシ驅逐隊ニ於テハ約二十二瓩内外ヲ最大トス

九、發煙ノ多少

發煙ノ狀況ハ兩種炭共大差ナキモ豆形煉炭ノ方稍濃キガ如シ

十、所要通風ノ程度

高燃燒度ニ於テハ大差ナキモ燃燒度低下スルニ從テ漸次豆形ノ方高度ノ通風ヲ要ス之レ角形煉炭ニ於テハ燃燒度ノ異ナルニ從テ碎炭ノ大サヲ異ニスル事ヲ得ルモ豆形ニ於テハ其ノ大サ常ニ一樣ナルニ依ル

十一、**クリンカー**形成狀況及多少ハ兩種共ニ大ナル經庭ナシ

十二、灰燼ノ多少ハ兩種共大差ナシ

十三、燃燒ノ難易比較

高燃燒度ニ於テハ兩種大差ナキモ低燃燒度ニ於テハ豆形ノ方稍燃燒シ易カラザルモノノ如シ

十四、焚火ノ難易比較

豆形ハ角形ニ比シ散布法ニ於テ若干ノ工夫ヲ要スルモ少シ習熟セバ何等ノ困難ヲ感ゼザルノミナラズ高度ノ燃燒ニ於テハ反テ火層ノ整平ヲ保ツコトヲ得テ焚火容易ナリ

十五、豆形煉炭ノ適當ナル形狀及大サ

豆形煉炭ノ適當ナル形狀及其大サニ關シテハ各種ノ形狀及大サニ就キ實驗ノ上ニアラザレバ遽ニ之ヲ斷定シ得ザルモ現形狀及大サニテ何等ノ不都合ヲ認メズ

十六、豆形煉炭ノミヲ使用スル場合ニ適當ナル石炭船搭載要具石炭庫内ノ設備、石炭積入口ノ大サ

散炭ニテ搭載スル場合ニハ石炭船ハ若干ノ余積ヲ存シテ搭載シ得ル樣ニナシ置キ艦内ニ取入ルヽ際最初ヨリ艙内底ヲ露出シ居ル樣設備セバ大ニ搭載力ヲ增大スルコトヲ得ベシ

又搭載要具トシテハハート形十能ノ準備ヲ要ス

但シ最初ヨリ袋詰トシテ供給サルヽコトヲ得バ石炭船内ノ設備ハート形十能共ニ不要ナリ

豆形煉炭搭載ノタメ特ニ石炭庫内ニ何等カノ設備ヲ施スノ要ナシ

石炭積入口ノ大サハ角形ノ場合ヨリモ遙ニ小ナルモノニテ充分ニシテ途中少許ノ屈曲アルモ差支ナシ

要之豆形煉炭ハ角形煉炭ニ比シ其ノ搭載速度ニ於テ劣レルモ之ヲ袋詰トシテ供給シ且デリツク裝置ヲ以テ搭載セバ角形煉炭ニ拮抗シ得ベキノミナラズ其他ニ於テハ優レル點多ク殊ニ一定炭庫容積ニ尉スル搭載量大ニシテ加之操炭竝搬炭困難ナラズ且ツ絶對ニ碎炭員ヲ要セズ焚火亦容易ナルヲ以テ軍用炭トシテ頗ル適當セルモノト認ム

（各艦ノ成績表ハ省略ス）

又艦政本部長ハ別ニ佐世保鎮守府司令長官ニ申進メ角形、豆形兩種煉炭ニ付貯藏竝ニ運搬ノ便否比較ニ關シ調査スル處アリ結局增設ノ煉炭機械ハ豆形トスルコトニ決シ大正四年八月左ノ通決裁ヲ經テ煉炭製造所擴張計畫ニ變更ヲ加ヘラレ此結果當初豫定ヨリモ製造能力ヲ增加スルコ

トトナレリ

大正四、八、一七　官房機密第一〇一二號決裁

海軍煉炭製造所擴張豫算ニ關スル件

曩ニ官房機密第三三五號ヲ以テ海軍煉炭製造所製造力增加ニ關シ決裁ヲ經候處其ノ後今回戰役ノ實驗ニ鑑ミ豆形煉炭ノ有利ナルヲ認メ實驗ノ結果良好ノ成績ヲ得タルヲ以テ增備機械ハ豆形ヲ採用スルコトニ決セリ然ルニ同機ハ角形ニ比シ廉ナルヲ以テ第一期擴張豫定角形機一臺ノ豫算ヲ以テ豆形機二臺ヅツ聯結スルモノ二組（豫定力量ノ約三倍余）ヲ購入スルコトヽ致度然ルトキハ其ノ力量增加ニ伴ヒ附屬設備（罐發電機、篩分機排滴器等）ヲ增加スルヲ以テ結局左記ノ通約五萬一千圓余ノ豫算不足ヲ生ズルモ製造力ヲ增加シ置クコトハ目下ノ急務ト思考セラルルニ付此際臨時軍事費ヲ以テ差繰支辨致度

擴張豫算總額

八〇、〇〇〇圓　谷口工場買收

二二、〇〇〇圓　土地買收

三三一、一三三圓	煉炭機械及器具		
一三七、九〇〇圓	土木建築		
計　五七一、四三二圓			
備考	煉炭機增備豫定數	公稱力量	實際力量　豫算
	角形　一臺	一二、五噸	九噸　一一〇、〇〇〇圓
	變更增備數		
	豆形　四臺	四〇噸	見込二八噸　八〇、〇〇〇圓

土地營造物豫算ハ前豫算範圍內ニテ大體支辨ノ見込

平塚海軍煉炭製造所長ハ之等ノ決裁ニ基キ大正四年九月海煉機密第二六號ノ三ヲ以テ詳細ナル擴張計畫ヲ提出セリ

擴張計畫改定（大正四年九月）

本計畫ハ擴張ヲ二期ニ分チ經費ノ關係上今回ハ先ヅ其ノ第一期計畫トシテ谷口工場（能力約七萬噸）ヲ增設シ從來ノ角形機（能力約十七萬噸）ヲ買收合併シ新ニ豆形機械（能力約十七萬噸）ト共ニ合計能力第一種炭年額四十一萬噸竝ニ之ガ關聯諸裝置ヲ整備セントスルモノニシテ

工場買收費	八〇、〇〇〇圓	
機械器具費	三二七、四七〇圓	
土木建築費	一六三、九六二圓	
合計	五七一、四三二圓	

ヲ計上セリ

右工事ノ實施ニ關シテハ先ヅ大正四年九月**ジョンソン**式豆形煉炭機、同式石炭乾燥機ノ購入認許セラレタルヲ始トシ逐次諸機械ノ調達ニ着手シ又土木建築ニ就テハ大正四年十一月官房機密第一三七六號ヲ以テ煉炭製造所增備工事至急施行方吳鎭守府司令長官ニ訓令アリ爾後工事ノ進行ニ伴ヒ機械及建築共ニ屢々計畫、工事要領等ノ變更アリ又戰局ノ影響ニ依ル鐵材ノ騰貴其他計畫ノ變更等ノタメ大正五年四月官房機密第四五四號決裁ニ依リ鐵材騰貴ノタメ金三四、三二八圓、機械的運搬裝置ノタメニ金五〇、〇〇〇圓又建築費ニ金四七、六二六圓合計拾參萬一千九百五十四圓ノ豫算ヲ增加セラレ着々工事ノ進捗ニ努メタリ

煉炭機械ハ高田商會トノ契約ニ係リ英國ヨリ輸入シ大正六年三月初頭神戸ニ陸揚セラレシガ右輸送ノ途中海難ノ爲二組四臺ノ內一臺分ハ部分品ヲ失ヒ之ヲ內地ニテ製作補充スルヲ要シ又關

豆型煉炭製造開始（大正六年度）

聯諸設備、土木建築工事中ニモ時局柄勞働不足等ニ影響セラレテ工事圓滑ヲ缺ケルコトアリテ煉炭機械一組丈ケハ同年十一月運轉ヲ開始スルニ至レルモ他ハ工事意外ニ遲レ大正九年度ニ入リ漸ク運轉ヲ開始セリ而シテ豆形煉炭ハ大正六年度ヨリ製造ヲ開始セシガ主ニ機構上ノ關係ニ由リ當初擬集力充分ナラザルノ嫌アリ先ヅ專ラ第二種煉炭ノミヲ製造シ逐次經驗ヲ積ムコトヽセリ（大正十二年度ニ至リ初メテ第一種煉炭ヲ製造スルニ至レリ）

尙右擴張工事ノ進行中艦政局ハ別ニ煉炭製造所將來ノ再擴張ヲ考慮シ先ヅ此際成ルベク速ニ隣接民有地ヲ海軍ニ收容シ置クノ必要ヲ認メツツアリシ處偶々明治六年以來長崎市稻佐ニ所有セル海軍貯炭場ハ最早今日ニ於テ之レヲ必要トスル見込モナク一方之ト隣接セル三菱造船所ハ豫テ海軍艦船ノ建造等ノタメ其ノ擴張ヲ要スルニ不拘他ニ適當ノ敷地ヲ見出シ難キ實情ニ置カレ在リタルヲ以テ海軍ハ同社ヲシテ先ヅ德山ニ於ケル煉炭所東方隣接地ヲ入手セシメ之ト及長崎市戸町所在土地若干トヲ同社ヨリ海軍ニ提供シ海軍ヨリ前起稻佐炭庫地ヲ三菱ニ交付スルコトヲ計畫シ大正六年十二月右土地交換ノ件ニ關シ仰裁官房第三七五五號ヲ以テ海軍大臣ノ決裁ヲ經タリ

爾來三菱側ニ於テハ右海軍ニ提供スベキ土地ノ買收等手配ヲ進メ海軍ハ大正八年三月官房第七八三號ノ二ヲ以テ內務省ニ照會夫々ノ手續ヲ經テ大正八年度ニ入リ之ガ交換ヲ了スルニ至リシガ恰モ之ニ先チ海軍ハ德山ニ製油工場ヲ建設スルコトトナリシタメ更ニ右三菱提供地ニ連接セル東方一帶ノ民有地ヲ買收シ茲ニ固有ノ煉炭製造所敷地ト一連ノ土地ヲ收容シ後年ノ燃料廠敷地ノ基トナスヲ得タリ右交換土地次ノ如シ

三菱造船所ト土地交換ニ依リ德山ニ於ケル海軍用地ヲ擴大ス（大正八年）

三菱ニ交付セル海軍用地

長崎市稻佐	八、二〇四坪	單價　三〇圓

海軍ニ提供セル三菱所有地

長崎市戸町	三、九九六坪九九	單價　二〇圓
德山町	三二、九七四坪八一	單價　六圓五一余
計	三六、九七一坪八	

（註）大正六年ノ頃ハ時局ノタメ經濟界活況ヲ呈シ諸種ノ企業頻ニ勃興セル時代ニシテ煉炭製造所東隣ノ民有地ノ如キニモ屢々工場等建設ノ企アルヤニ報ゼラレ若シ其ノ實現ヲ見ンカ煉炭製造所ノ伸展ヲ封ゼラルルノミナラズ所在ノ關係上軍事的ニモ好マシカラザル結果ヲ招來スル虞アリ當時海軍當局ガ速ニ此ノ部ノ收容ニ努メタルハ全ク之等四圍ノ情勢

官業整理委員會ニ於テ煉炭所ノ整理ヲ審議ス（大正四―五年）

ヲ考慮セルガ爲ニシテ元々製油所建設トハ關係ナク交渉ヲ進メタルモノナリ

而シテ其後大正七年十二月海軍製油所新設ノ内議決セラルルヤ當時既ニ右土地交換ノ交渉モ成立シアリシ折柄ナリシヲ以テ新製油所ノ建設地モ容易ニ德山ニ決定スルヲ得タル次第ナリキ

之ヨリ先大正四年大隈内閣ノ當時官業整理委員會ヲ置ケリ其主旨ニ關シテハ第一編海軍採炭所ノ記事ニ於テ述ベタルガ如シ而シテ本委員會ハ海軍煉炭製造所（大嶺炭山共）ヲ朝鮮總督府平壤鑛業所ト共ニ之ヲ特種會社ノ經營ニ移サントスルノ整理案ヲ審議スルタメ先ヅ特別委員（江木、久保田、加藤、町田、及鈴木海軍次官）ノ議ニ附シタリシガ右特別委員ハ之ニ就キ

第一、特別ノ法律ヲ以テ設立セラルベキ煉炭株式會社ニ拂下

第二、官民合同會社ヲ設立シ政府ハ資本ノ半額ヲ引受ケ海軍煉炭製造所及平壤鑛業所ノ設備一切及鑛業權ヲ以テ出資ニ充シ事業ヲ繼承セシム

ノ二案ニ付審議スル處アリシガ結局大正五年四月ニ至リ本件整理ノ必要ナキモノト決議セリ

此頃歐州戰局進展シ我國ニ於テモ石炭及其ノ運賃益々騰貴ヲ告ゲ艦營燃料ノ經理上少カラズ困難ヲ加フルニ至リシガ艦政局ハ大正五年豫テノ調査ニ基キ日獨戰以來我守備軍ノ軍政下ニ經營

溜川炭新原炭ヲ主原料トシ新煉炭ヲ第二種炭トシテ採用ス

第二種和炭代用トシテ第二種煉炭ヲ供用ス（大正六年）

セル山東省溜川炭ヲ比較的廉價ニ購入シテ第二種煉炭原料ニ採用セル折柄更ニ從來問題タリシ海軍採炭所ノ新原粉炭ヲ篩分ケテ煉炭配合用ニ供シ以テ煉炭ノ單價ヲ低下シ幾分ニテモ燃料ノ經理ヲ容易ナラシメンコトヲ企テ大正五年十二月左ノ通燃料經理方針ニ關シ海軍大臣ノ決裁ヲ仰ギ當分ノ間新規格ニ依ル廉價ノ第二種煉炭ヲ製造スルコトトセリ蓋シ新原粉炭ハ往年海軍煉炭製造ノ初期ニ於テ一度配合原料トシテ試用セラレタルコトアリシノミナルガ今回再ビ之ヲ採用スルニ至レルモノナリ

斯クテ煉炭ノ價格低下セル結果大正六年三月官房第七二六號ヲ以テ吳ニ於テハ特ニ第二種煉炭ヲ第二種和炭ニ代用セシメ得ルコトトセリ

大正五年十二月二十七日官房機密第一六一九號決裁

燃料經理方針ニ關スル件

艦隊ノ行動用燃料ヲ增加シテ敎育訓練ノ實施ニ遺憾ナカラシメ同時ニ燃料重油ノ貯藏ヲ確實ニシテ出師準備ノ完成ヲ期スルコトハ海軍ノ現狀ニ照シ最モ緊要トスルコトナレドモ每年度經常豫算成立ノ狀態ハ常ニ是等ノ必要ト伴ハズ加フルニ目下戰役ノ影響等ヲ受ケ燃料ノ市價

及運搬ノ費用等ニ著シキ暴騰ヲ來シタルヲ以テ現狀ヲ以テ推移スルトキハ啻ニ行動燃料ノ增加又ハ重油貯藏ノ目的等ヲ達シ得ザルニ止マラズ却テ例年ノ行動日數ヲ減少スルノ不得止ニ至ル虞ナシトセズ依テ艦營費ノ增加ハ將來ニ於テ必ズ認メラルベキモノトシ差當リ現在ニ於ケル豫算ノ範圍內ニ於テ前記兩目的ノ幾分ヲ達シ併セテ緊張セル豫算狀態ヲ緩和センガ爲大體左記ノ方針ニ依リ燃料經理ノ計畫ヲ進メラレ可然哉

右仰高裁

左　記

一、燃料ノ蒸發效力ヲ減ズルコトナク且ツ罐ノ使用保存ニ適スル範圍ニ於テ平時用炭ノ價格ヲ低下スル爲第二種煉炭ノ規格中試焚ニ於ケル灰及**クリンカー**ノ量ヲ百分ノ十八以下トス

二、前項ノ煉炭製造ニハ主要原料トシテ平壤炭ノ外溜川炭ヲ用ヒ又配合炭トシテハ主トシテ價格ノ安定ニシテ且ツ低廉ナル新原粉炭ヲ使用ス但シ溜川炭以外ニ適當ナル原料ヲ得バ更ニ之ヲ使用セントス本煉炭試製ノ成績ニヨレバ固定炭素ノ量百分ノ五十七八ナレドモ今後漸次百分ノ六十以上ニ達セシメンコトヲ期シツツアリ幸ニ此ノ目的ヲ遂グルコトヲ得バ之ガ實用上ノ成果ニ於テハ現ニ使用中ノ第二種煉炭ト比較シ毫モ差異ナク**クリンカー**ノ量ニ於テハ寧ロ之ヲ減少スルコトヲ得ベシ

三、溜川炭ハ目下陸軍ノ直營ニ屬スルガ故ニ市價ニ關係ナク適良ナル價格ノ協定ヲ爲シ得ベキ見込ナルモ一般船腹不足ノ影響ヲ受ケ之ガ運搬ニ多大ノ費用ヲ要スルヲ以テ差當リ海軍運送船ヲ用ヒテ之ヲ輸送センコトヲ期ス

四、一般炭價ノ狀況ニ依リテハ第二種和炭使用ノ場合ニ第二種煉炭ヲ供用シ經濟上ノ調節竝取扱上ノ便宜ヲ計ル

五、前諸項實施ノ爲大約左記ノ通艦營費ノ負擔ヲ減ジ得ベキガ故ニ之ニ依リテ艦隊ノ行動燃料ヲ增加シ同時ニ燃料重油每年度ノ貯藏ヲ確實ニス

(イ) 現在ノ第二種煉炭ニ比シ每瓲ノ價格約金貳圓ヲ低下シ得ベキ見込ナルガ故ニ每年ノ例ニヨリ約貳拾萬瓲ノ製造ヲ爲スモノトセバ先ヅ金四拾萬圓ヲ節約スルコトヲ得

(ロ) 溜川炭ノ運搬ハ運送船ニ依ルモノトシ前項貳拾萬瓲ノ煉炭原料中五萬瓲ノ溜川粉炭ヲ使用スルトセバ時價ニ於テ更ニ約金拾五萬圓以上ノ節約ヲ爲スコトヲ得

六、第一種煉炭ノ準備ハ其ノ規定額八十五萬瓲ニ對シ大正六年度ノ終リニ於テ約八十萬瓲ニ

達セシメ其後約五ケ年ヲ以テ規定額ノ準備ヲ完了スルノ方針ヲ採ル

七、内地ニ於ケル燃料重油生産ノ豐富ナラザル實際ト出師準備用トシテ貯藏ノ急ナルモノアル現狀トニ鑑ミ教育訓練ノ實施上ニ差支ナキ限リ艦船ニ對スル重油配賦率ヲ節減シ石炭ヲ以テ代用スル方針ヲ採ル

八、（省　略）

九、新原炭ハ由來粉炭ノ混入多クシテ著シク炭質ヲ不良ナラシムルガ故ニ今若シ是等粉炭ヲ擧ゲテ煉炭材料ニ利用スルニ至レバ自然同炭ノ價値ヲ高メ工作廳ノ需用ヲモ增スコトヲ得ルハ明ナリ依テ今後更ニ增掘ノ計畫ヲ立ツ

十、（省　略）

（註）煉炭ノ品質規格ハ

炭種	試焚 蒸發水量	試焚 灰及クリンカー總量（百分比）	試焚 クリンカー量（百分比）	分析 水分（百分比）	分析 灰分（百分比）	分析 固定炭素（百分比）	分析 總硫黄量（百分比）	分析 擬集力（百分比）
第一種煉炭	一〇、〇瓩以上	一〇、〇以下	四、〇以下	一、五以下	五、〇以下	六、〇以上	一、〇以下	五〇、〇以上
第二種煉炭	八、〇瓩以上	二、〇以下	四、〇以下	三、五以下	八、〇以下	六〇、〇以上	二、〇以下	五〇、〇以上
備考	試焚及分析試驗ノ内其ノ一ヲ省略スルコトヲ得							

ナルニ對シ本文經理方針ニ依ル新煉炭製造ニ付大正六年三月官房第七二五號ヲ以テ當分ノ間左ノ規格ニ適スル煉炭ヲ第二種煉炭トスル旨ヲ定メラレタリ

炭種	試焚 蒸發水量	規格 クリンカー（百分比）	規格 灰及クリンカー（百分比）	規格 擬集力（百分比）
海軍製	八、〇瓩以上	四、〇以下	一八、〇以下	五〇、〇以下
天草煉炭	同右	四、五以下	一三、〇以下	同右
備考	天草煉炭ニ對シテ耐火粘土入（百分ノ三）配合煉炭ハクリンカーノ量一割三分以内灰三割八分以内本規格ヨリ增加ヲ許ス			

其後製造使用ノ實績ニ鑑ミ翌大正七年五月官房第一八四三號ヲ以テ當分ノ間左ノ規格ニ適スル煉炭ヲ各第一種炭又ハ第二種炭トシテ供用シ得ルコトヽナレリ

時局ノタメ煉炭增製（大正三—七年）

平壤炭ノ增産ヲ促シ又外國炭ノ輸入ヲ計ル

石油代用品ノ研究

炭種	試焚分析					
	蒸發水量	灰及クリンカー總量（百分比）	クリンカー量（百分比）	水分（百分比）	灰分（百分比）	固定炭素（百分比）	總硫黃量（百分比）	擬集力（百分比）
第一種煉炭	一〇、〇瓩以上	八、〇以下	二、〇以下	一、五以下	八、〇以下	七五、〇以上	一、〇以下	五〇、〇以上
第二種煉炭	九、〇瓩以上	一五、〇以下	三、〇以下	二、五以下	一五、〇以下	六〇、〇以上	二、〇以下	五〇、〇以上
備考	天草煉炭ニ限リクリンカー量五、〇迄ヲ許ス							

又煉炭製造所ハ大正三年歐州大戰以來時局ニ應ジ別表ニ示スガ如ク極力煉炭ノ增製ヲナシ以テ準備燃料ノ充實ニ努メタルガ之ガ爲別ニ述ブルガ如ク朝鮮總督府ニ交渉ノ上平壤炭ノ臨時增掘ヲナサシメ次デ平壤鑛業所ノ大擴張ヲ促シ更ニ國內原料炭ノ不足ヲ補フタメ前記淄川炭ノ外ニ鴻基炭開平炭等ノ外國炭ヲ輸入使用スルニ至レルコト後ニ述ブルガ如シ

又此間海軍ハ我石油燃料資源不足ノ實情ニ鑑ミ所謂代用燃料ノ研究ヲ重視シ特ニ煉炭製造所ヲシテ大正六年以來粉末炭燃燒石炭及油頁岩低溫乾餾、膠狀燃料等ニ關スル實驗ニ從事セシメタルコト別ニ述ブル處ノ如シ

重油タンク建設ノ計畫ヲ止メ之ガ豫算ヲ煉炭荷役ニ關スル海岸設備ニ振リ向ク（大正八年五月）

煉炭製造所ヲ廢ス海軍燃料廠煉炭部トナル（大正十年四月）

軍備縮少ノタメ煉炭ノ需要ヲ減ズ（大正十一年）

尙當時德山ニ於テ煉炭ノ外重油燃料ヲモ供給セシムルタメ水陸設備費二十五萬余圓ヲ以テ大正八年度ヨリ煉炭製造所構內ニ重油タンク及附帶設備ヲ建設スルコトニ決セラレアリシガ其ノ着手ニ先チ同地ニ臨時軍事費支辨給油設備ヲ新設スルコトトナリシタメ右水陸設備費ニ依ルタンクヲ取止メ主ニ煉炭所突堤等主ニ煉炭ニ關スル海岸設備ノ整備ニ振向ケラレタリ

（大正八年五月官房第一五八五號）

斯ノ如クシテ我煉炭製造所ハ時局以來大ニ其ノ內容ヲ充實スルニ至リシガ大正八年以來同所ノ附屬設備トシテ建設ニ着手セラレタル給油設備（製油工場、重油槽等）ノ大略竣工スルニ及ビ大正十年四月煉炭製造所ヲ廢シ新ニ海軍燃料廠ヲ置キ海軍煉炭事業ハ同廠煉炭部ノ所掌トナレリ

然ルニ大正十年華府會議開催セラレ海軍軍備縮少ノタメ我海軍ニ於テモ舊艦ノ多數ヲ廢棄スルニ至リシ結果煉炭ノ需要ハ爾後著シク減少シ之ニ反シ重油燃料ハ益々重要トナリシヲ以テ煉炭事業ニ關シテハ既存ノ製造力ヲ維持シ海岸荷役其ノ內容施設ノ整備ニ止ムルコトトセリ

而シテ海軍燃料廠ニ於ケル煉炭ノ製造モ別表ノ如ク大正十二年度ヨリハ第一種煉炭約四萬瓲第二種煉炭約十六萬瓲合計二十萬瓲前後ニ止マリ煉炭部事業ハ充分ノ能力ヲ發揮スルヲ得ザル狀

第一種煉炭ヲ主用シ第二種煉炭ヲ副用トスルノ方針ヲ執ル（大正十三年）

第一種煉炭増製（大正十四年度）

況トナレリ

海軍省軍需局ハ之等煉炭ノ製造、準備貯藏竝ニ艦隊等ニ於ケル訓練ノ關係等ヲ考究ノ結果大正十三年九月第一種煉炭ヲ主用シ第二種煉炭ヲ副用トスルノ件ニ關シ左ノ通海軍大臣ノ決裁ヲ得タリ、次デ翌大正十四年三月達第四十二號燃料經理規程中改正ニ當リテハ右ノ主旨ニ基キ著シク第一種煉炭供用ノ範圍ヲ擴大セラレ之ガ爲海軍燃料廠ニ於テモ大正十四年度ヨリ第一種煉炭ノ増製セシメラルヽコトヽナレリ

大正一三、九、二九　官房機密第一一八三號決裁

第一種煉炭ヲ主用シ第二種炭煉炭ヲ副用スルノ件

我海軍ニ於ケル常時行動用及平常用煉炭ハ大部分第二種煉炭ヲ使用シ第一種炭煉炭ハ戰技演習公試運轉等ニ消費セラルルノミニシテ其額僅少ナリ（一炭部出師準備用トシテ貯藏ス）從テ海軍燃料廠ニ於テハ主トシテ第二種煉炭ヲ生産シ第一種炭煉炭ノ生産額ハ其ノ四分ノ一ニ過ギザルナリ今之ヲ別冊第二艦隊第一、二種炭煉炭使用比較實驗ノ成績ニ鑑ミ別紙理由書ニ記述セル如ク前記生産額ノ割合ヲ轉倒シ第一種炭煉炭ヲ燃料廠ニ於ケル主生産品トシテ之ヲ主トシテ常時艦船行動用ニ當テ第二種炭煉炭ヲ平常碇泊用燃料トシテ副産スルコトニ改メナバ經濟上ヨリ見テ甚ダ少許ノ不利ノ點アリト雖モ兵術上訓練上乃至貯藏準備上獲ル所頗ル大ナリト認ム然レドモ煉炭主要原料タル印度支那鴻基産石炭ノ増量調達ノ關係上右ヲ直ニ實施シ難キヲ遺憾トスルモ爾後事情ノ許ス限リ順次第一種炭煉炭生産額ヲ増加シテ海軍ノ主要炭トシ右ニ從テ第二種炭煉炭ノ生産額ヲ減ジテ副用炭トスルノ方針ニ進ミ可然哉

右仰高裁

（別冊別紙省略）

假稱第三種煉炭製造（大正十四年度）

民間ノ委託ニ應ジ煉炭ヲ製造ス（大正十四年度）

又一方新原炭山ノ經營トモ關聯シ新原粉炭ヲ以テ第三種和炭代用ニ適スル煉炭ノ製造ヲ企テ海軍燃料廠ノ研究ニ基キ大正十四年度ニ於テ先ヅ同廠煉炭部ニ於テ約二千瓲ノ新原粉炭製煉炭（當時假稱第三種煉炭ト稱シ其ノ品質ハ工業分析ニ於テ水分四％以下灰分二〇％以下固定炭素四〇％以上總硫黄量三％以下ヲ標準トセリ）ヲ試製シ適宜部内陸廳及艦船ノ一部ニ配給シテ試用セシムルコトニ取運ビタリ右新原粉炭製煉炭製造ノ趣旨ハ左記文書ニ依リ知ルヲ得ベシ

其他燃料廠ハ余力ヲ以テ大正十四年度中民間（旭炭鑛主田中榮藏、貝島商業會社、日本金屬會社）ノ委託ニ應ジ煉炭數百瓲ヲ製造セリ又鐵道省ノ委託ニ應ジ新原炭ヲ主原料トスル煉炭數十、

噸ヲ製造セリ

大正十四年九月軍需燃第三〇九號

池田軍需局長ヨリ山下燃料廠長ヘ照會

新原粉炭製煉炭（假稱第三種煉炭）ニ關スル件

新原ニ於ケル鑛量漸次減少スルニ伴ヒ粉炭ノ塊炭ニ對スル比率逐年增加スル傾向アル旨聞及候處元來採炭部ノ事業ハ海軍トシテ容易ニ中斷シ難キ事情モ有之將來其ノ命數維持ノ爲ニハ適當ナル對策ヲ講ズル必要ヲ認メ居ル次第ナルモ艦船其ノ他陸上部隊等ノ燃料タルベキ塊炭ノ需要ハ直ニ之ヲ減ズルヲ得ザルヲ以テ差當リ新原粉炭ヲ主要原料トシテ煉炭（假稱第三種煉炭）ヲ製造シ之ヲ第三種塊炭ニ代用セシムルヲ可ナリトスル內議ニ有之候條左記要領ニ依リ調査ノ上意見提出相成樣致度右申進ス

記

一、最近五ヶ年間ニ於ケル坑道切羽ノ狀況ト產炭額ノ關係竝塊粉ノ比率

二、開鑿採炭經費ノ趨勢

三、粉炭處理ノ狀況

四、煉炭部ニ於テ試製セル新原粉製煉炭ノ價値

五、年額十萬瓲製造ニ適スル工場設備ヲ新原ニ置クノ可否

六、前號ノ設備ニヨル新原粉製煉炭ノ製造工程別及其經費ノ見込

七、新原粉製煉炭ノ規格案

八、其ノ他本件ニ關聯シ必要ナル調査

海軍煉炭製造所煉炭製造高表

	第一種煉炭			第二種煉炭			合計
	英粉煉炭（角）	第一種（角）	同上（豆）	第二種（角）	同上（豆）	谷口工場ヘ委託ノ分	
明治三八	七三、八三三			四、九四四			七八、七七六
三九	五七、七九〇			五八、七〇七			一一六、四九七
四〇	六一、二〇五			一〇一、四五〇			一六二、六五五
四一	六〇、八〇〇	⊗ 六、〇〇〇	長門煉炭 四、〇〇〇	一〇四、八四〇			一六五、六四〇
四二	一六、六二〇			一〇六、〇〇〇			一二六、六二〇

四三		四六、七六八		九九、二八五		五、〇〇〇	一五一、〇五三	
四四	四、七二六	四三、四八四		九五、〇〇〇		二五、〇〇〇	一六八、二〇〇	
四五	五、七九六	五六、五〇四		八六、九〇七		四五、〇〇〇	一九四、二〇七	
大正二	三四	五九、六七六		八五、〇〇〇		四五、〇〇〇	一九〇、〇〇〇	
三	一、〇二一	一〇八、五六一		八五、〇〇三		六五、〇〇〇	二五九、七七五	
四	九、三三一	一二七、八六八		六九、八〇〇		八八、〇〇〇（四年度限リニテ取止トス）	二九四、九〇〇	
五	二九	九九、五五〇		二〇一、四八二			三〇一、三七四	
六		七〇、〇〇〇		二六〇、〇九六	二、八七一		三四一、九六七	
七		六〇、〇八〇		二七一、三一二	三二、二四二		三六三、六四三	
八		四〇、〇一六		二四二、五一三	一三、二九七		二九五、八二六	
九		四五、〇九七		二六六、二九二	三四、八八五		三四六、二七四	
一〇		八〇、〇〇五		二三八、〇六四	三一、九六六		三四〇、〇三五	
一一		四〇、〇一〇		一七六、八九二	二七、五〇〇		二四四、四〇二	
一二		三六、二六一	四、九四一	一三三、七九一	三〇、二九一		二〇五、二八四	
一三		三〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一三六、〇〇〇	三〇、〇〇〇	假稱第三種煉炭（十四年度ヨリ）	一九六、〇〇〇	
一四		五八、七七二	二〇、七〇六	五八、六三二	四五、四五〇	二、〇五七	一八五、六一七	事業概況報告ニヨル
一五							（外ニ受託煉炭七六八噸）	
合計								

備考

○明治三八年ヨリ四二年ニ至ル期間ノ製造高ニ付テハ海軍燃料廠部歴（大正十四年三月同廠編）所載ノ數字ト海軍省年報所載ノ數字トニ大差アリ而シテ之レヲ關係文書ニ照スニ前者ノ方眞ニ近シト認メラルルニ依リ本表ハ右部歴ニ依レリ而シテ明治四十一年度始メテ製造セル長門炭ヲ原料トスル第一種煉炭⊗六千屯ハ廠歴ニハ之ヲ缺クモ年報ニ記載アリ

○明治四十三年以降ハ海軍省年報ト廠歴ト殆ド差ナシ但シ角形豆形谷口工場ヘノ依託煉炭等ノ判別ニ便ナルタメ廠歴ニ依ルコトトセリ

但シ廠歴ニ在テハ大正四、五年度ニ於ケル英粉煉炭ヲ第一種角形ノ内ニ包合シアルヲ以テ本表ニハ海軍省年報ノ數字ヲ採リ之ヲ區別掲記セリ（尚之等ノ數字毎年度事業概報ト一致セザル場合アリ）